田能遺跡群発掘調査概要・Ⅲ

－農地還元利活用事業「樫田地区」に伴う発掘調査－

２００２年３月

大阪府教育委員会

はしがき

田能遺跡群の所在する高槻市大字田能は、北摂山地の東北部の山々に囲まれた山間小盆地（田能盆地）に位置し、大阪府では極めて希少な山と緑に囲まれた地域であります。

今回の発掘調査は、農地還元利活用事業（樫田地区）に先立って、平成12年度から平成13年度にわたって実施したものです。当該地区の発掘調査は、平成11年度に当該予定地内の遺跡確認調査および早期着手地区の発掘調査を実施し、今年度で3年目を迎えています。

田能盆地は、平安時代末期から鎌倉時代初期にかけての文献が残存し、また北西の山腹に戦国時代の部将である明智光秀が築城したと伝えられる山城の田能城跡など、歴史的には著名な地域でありました。しかし、埋蔵文化財については、以前に高槻市教育委員会による遺跡分布調査が行われ、田能北遺跡、田能南遺跡が発見された以外は、実態が不明な地域でありました。しかし、これまで3年間の発掘調査によって徐々にではありますが、田能盆地内の遺跡の状況が明らかになってきました。

前回の調査までは、文献や検出した遺構により平安時代末期から鎌倉時代初期を中心として、人々がこの地に定住し始めたと考えられていました。しかし平成14年度の調査によって、鎌倉時代の遺構に加え、平安時代初期や平安時代後期の建物を検出したことから、その時代には生活が営まれていたことが初めて確認され、大きな成果を挙げることが出来ました。

最後になりましたが、発掘調査にあたってご協力いただきました高槻市教育委員会、樫田地区土地改良区、地元自治会各位をはじめとする多くの関係者の方々に厚く感謝いたしますとともに、今後とも文化財保護行政について変わらぬご理解とご協力をお願い申し上げます。

平成14年3月

大阪府教育委員会
文化財保護課長　小林　栄

例　　言

1. 本書は、大阪府教育委員会が、大阪府環境農林水産部の依頼を受け、農地還元利活用事業（樫田地区）に先立って実施した、高槻市大字田能所在、田能遺跡群発掘調査概要・Ⅲである。

2. 現地調査は、平成12年度および平成13年度にわたって実施し、田能南遺跡を平成12年９月から平成13年３月、田能北遺跡を平成13年７月から同年12月に文化財保護課調査第１グループ技師奥和之が担当した。それに伴う整理作業は、各年度毎に調査管理グループが平行して行い、平成14年３月に全ての作業を終了した。

3. 調査の実施にあたっては、高槻市教育委員会、大阪府環境農林水産部、大阪府北部農と緑の総合事務所、樫田地区土地改良区、地元自治会をはじめとする諸機関および下記の方々にご指導、ご教授を賜った。

　橋本久和（高槻市教育委員会）、重金　誠（能勢町教育委員会）

4. 本調査の写真測量は、平成12・13年度を共に株式会社サンヨーに委託し、撮影フィルムについても同社で保管している。

5. 本書の執筆・編集は、奥が担当した。

凡　　例

1. 座標、方位については国土座標、標高については東京湾平均海水面（T．P．）を基準とした。

2. 遺構の色調については、小山正忠・竹原秀雄「新版標準土色帳」日本色彩研究所1992を使用した。

3. 遺物は、挿図、図版および遺物観察表の番号と一致させた。

目　　次

はしがき
例言
目次
第１章　はじめに …… 1
第２章　田能南遺跡の調査 …… 3
　第１節　概要 …… 3
　第２節　Ａ地区の調査 …… 3
　第３節　Ｂ地区の調査 …… 7
　第４節　Ｃ地区の調査 …… 12
　第５節　Ｄ地区の調査 …… 13
　第６節　Ｅ地区の調査 …… 19
　第７節　Ｆ地区の調査 …… 21
第３章　田能北遺跡の概要 …… 25
第４章　まとめ …… 33
出土遺物観察表 …… 35
報告書抄録 …… 44

挿　図　目　次

第１図　大阪府と調査地点 …… 1
第２図　周辺の遺跡と既往の調査区 …… 2
第３図　田能南遺跡　Ａ地区基本層序図 …… 3
第４図　田能南遺跡　Ａ・Ｂ地区平面図 …… 4
第５図　田能南遺跡　Ａ地区溝１平面・断面図 …… 5
第６図　田能南遺跡　Ａ地区出土遺物 …… 6
第７図　田能南遺跡　Ｂ地区基本層序図 …… 7
第８図　田能南遺跡　落込み１出土遺物１ …… 7
第９図　田能南遺跡　落込み１遺物出土状況 …… 8
第10図　田能南遺跡　落込み１出土遺物２ …… 9
第11図　田能南遺跡　Ｂ地区出土遺物 …… 10
第12図　田能南遺跡　Ｃ地区平面図 …… 12
第13図　田能南遺跡　Ｃ地区基本層序図 …… 12
第14図　田能南遺跡　Ｃ地区出土遺物 …… 12
第15図　田能南遺跡　Ｄ地区平面図 …… 13
第16図　田能南遺跡　Ｄ地区基本層序図 …… 14
第17図　田能南遺跡　Ｄ地区建物１平面・断面図 … 15
第18図　田能南遺跡　Ｄ地区建物２平面・断面図 … 16
第19図　田能南遺跡　Ｄ地区建物３平面・断面図 … 16
第20図　田能南遺跡　Ｄ地区杭跡平面・断面図 …… 17
第21図　田能南遺跡　Ｄ地区建物４平面・断面図 … 17
第22図　田能南遺跡　Ｄ地区遺構出土遺物 …… 17
第23図　田能南遺跡　Ｄ地区土坑１平面・断面図 … 18
第24図　田能南遺跡　Ｄ地区出土遺物 …… 18
第25図　田能南遺跡　Ｅ地区基本層序図 …… 19
第26図　田能南遺跡　Ｅ地区出土遺物 …… 19
第27図　田能南遺跡　Ｅ地区平面図 …… 20
第28図　田能南遺跡　Ｅ地区遺構出土遺物 …… 20
第29図　田能南遺跡　Ｅ地区構列１平面・断面図 … 20
第30図　田能南遺跡　Ｆ地区平面図 …… 21

第31図　山能南遺跡　F地区基本層序図 …… 22
第32図　田能南遺跡　F地区土坑2・3平面・断面図 … 23
第33図　田能南遺跡　F地区出土遺物 …… 23
第34図　田能北遺跡　平面図 …… 24
第35図　山能北遺跡　基本層序図 …… 25
第36図　田能北遺跡　B地区南東部平面・断面図 …… 26
第37図　田能北遺跡　B地区出土遺物 …… 27
第38図　田能北遺跡　C地区建物群平面・断面図 …… 28
第39図　田能北遺跡　C地区出土遺物 …… 29
第40図　田能北遺跡　E地区建物1平面・断面図 … 30
第41図　田能北遺跡　E・H地区出土遺物 …… 31
第42図　田能北遺跡　I地区建物2平面・断面図 … 32
第43図　山能北遺跡　I地区建物3平面・断面図 … 32
第44図　田能北遺跡　I地区出土遺物 …… 32
第45図　田能地区中世土地利用想定図 …… 34

表　目　次

表1　櫃船神社棟札 …… 34
表2　出土遺物観察表1 …… 36
表3　出土遺物観察表2 …… 37
表4　出土遺物観察表3 …… 38
表5　出土遺物観察表4 …… 39
表6　出土遺物観察表5 …… 40
表7　出土遺物観察表6 …… 41
表8　出土遺物観察表7 …… 42
表9　出土遺物観察表8 …… 43

図　版　目　次

図版表紙　調査地区全景（南西より）
図版1　田能南遺跡
1. A地区全景（南より）　2. B地区遺物出土状況（東より）
3. A地区基本断面（2）　4. B地区基本断面
図版2　田能南遺跡
1. 落込み1遺物出土状況（北より）
2. 落込み1遺物出土状況細部（東より）
3. B地区全景（西より）
図版3　田能南遺跡
1. D地区全景（東より）　2. D地区全景（西より）
3. D地区基本断面（4）　4. D地区基本断面（1）
図版4　田能南遺跡
1. 建物1・2（東より）　2. 建物1 SP10　3. 建物1 SP12
4. 建物1 SP13　5. 建物1 SP62　6. 建物1 SP64
7. 建物1 SP65　8. 建物2（東より）
図版5　田能南遺跡
1. F地区全景（西より）　2. 構列1（西より）
3. E地区基本断面　4. 構列1　SP148
5. 構列1　SP149　6. 構列1　SP150
7. 構列1　SP151
図版6　田能南遺跡
1. F地区全景（南より）　2. 土坑2・3（南より）
3. F地区基本断面（1）　4. F地区基本断面（4）
図版7　山能北遺跡
1. 全景（南東より）　2. B・C・D・I地区全景（東より）
3. C地区基本断面　4. E地区基本断面
5. I地区基本断面
図版8　田能北遺跡
1. C地区全景（南より）　2. C地区建物群（北より）
3. C地区建物群（南西より）
図版9　山能北遺跡
1. E地区建物1（南より）　2. 建物1　SP10
3. 建物1　SP25　4. 建物1　SP68
5. 建物1　SP92　6. SP20遺物出土状況
7. SP93遺物出土状況　8. I地区全景（南より）
図版10　田能北遺跡
1. 建物3（北東より）　2. 建物3　SP54　3. 建物3　SP62
4. 建物3　SP69　5. 建物2（東より）　6. 建物2　SP26
7. 建物2　SP32　8. 建物2　SP87
図版11　出土遺物
図版12　出土遺物
図版13　出土遺物
図版14　出土遺物

第1章　はじめに

田能南遺跡および田能北遺跡（第1図、図版表紙）は高槻市大字田能地区に所在し、高槻市の北部、市街区域から約12km離れた大阪府の北東部、北摂山地の穏やかな山々に囲まれた標高350m前後の東西約0.3km、南北約1kmを測る小規模な山間盆地（田能盆地）に立地する。当該地区は、北と西を亀岡市、東を京都市と接しており、大阪府の地形でいえば、北に瘤状に飛び出した形状をなしている。

今回の発掘調査の経緯となった大阪府営農地還元利活用事業（樫田地区）は、山間盆地の比較的傾斜のきつく狭小不整形で統一性のない耕地を、府内の公共事業などによって生じた残土を利用し埋め立て、広い水田に整備し、農作業の効率化を図ろうとする事業である。

第1図　大阪府と調査地点

これに伴う発掘調査は、平成11年度に実施した遺跡確認調査[1]をかわきりに、これまで神宮寺西遺跡（平成11年度）、田能城跡（平成11年度）、田能北遺跡A地区（平成12年度）の調査[2]を3年間継続して実施している。今回の調査は、平成11年度に実施した田能盆地内の遺跡確認調査の結果に基づき、本府教育委員会と本府環境農林水産部と協議を行い、基本的に盛土によって遺跡の保存を図るが、切り土により遺跡が破壊される地域に限定して発掘調査を行うこととなった。

調査は、平成12年度に田能南遺跡、平成13年度に田能北遺跡（B～I地区）について実施した。

田能南遺跡（面積2211m²）については、平成12年9月に調査を開始し、平成13年3月をもって終了した。

田能北遺跡（面積2950m²）については、平成13年6月に調査を開始し、同年12月をもって終了した。

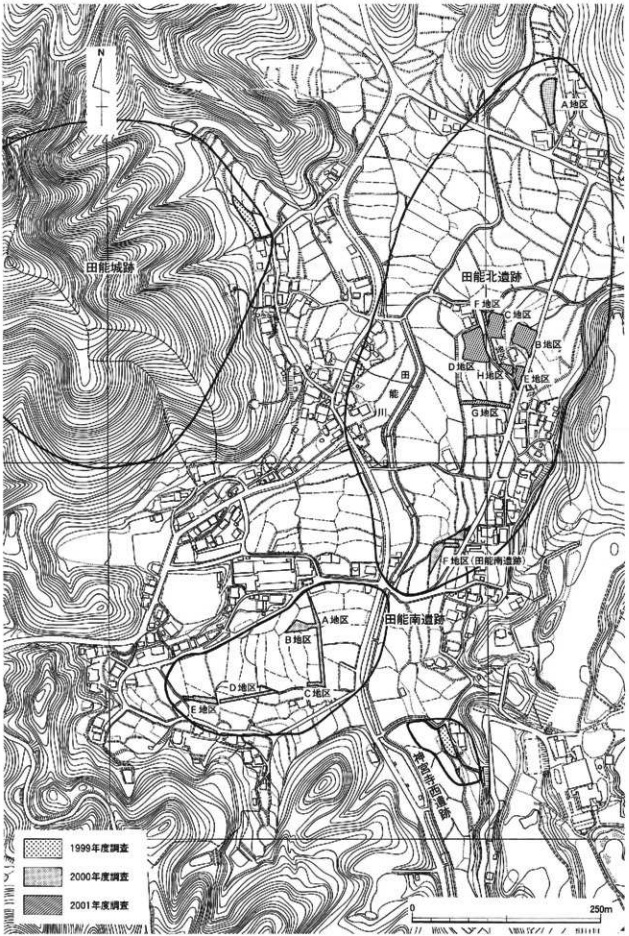
調査の方法は、基本的に耕作土層および床土層をバックホウによって、厚さ約0.3m除去した後、人力により厚さ0.3mから0.35mの遺物包含層を地山まで掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。

なお、当該地区における位置と環境については、『田能遺跡群発掘調査概要・Ⅱ』[3]を参照されたい。

註>

1）大阪府教育委員会『田能地区遺跡確認調査概要』2000

2）大阪府教育委員会『田能遺跡群発掘調査概要・Ⅱ』2001



第２図　周辺の遺跡と既往の調査区

第２章　田能南遺跡の調査

第１節　概要（第２図）

田能南遺跡は、田能盆地の南側に広がる遺跡で、遺跡の大半は田能川の西に存在する谷の縁辺部から中央にかけて存在し、平成11年度の遺跡確認調査で一部は、田能川の東側の丘陵縁辺部にも広がることが判明した。遺跡の規模は、東西長約400m、南北幅約150mを測る。

今回の発掘調査対象地域の大半は、農業用水路予定地を中心とし、周知の遺跡の範囲内をほぼ「L」字状に巡る形状を示している。

調査面積は約2211㎡を測る。検出した遺構は、建物４棟、土坑３基、建築部材の集積場１ヶ所、溝、自然流路などである。

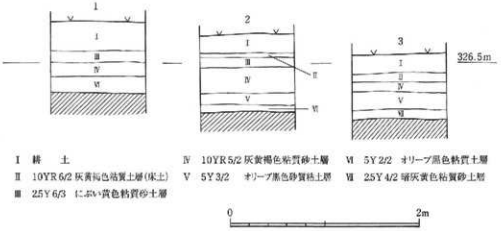
第２節　A地区の調査

1. 調査の概要（第４図、図版１－１）

A地区は、盆地谷部の開口部付近に位置するX＝－116,187、Y＝－37,234付近からX＝－116,275、Y＝－37,220付近までの基本的に幅約５m、長さ約100mを測り、北側の丘陵縁辺部と南側の丘陵縁辺部とを結ぶ南北に長い調査区である。検出した遺構は、中世と推定される溝１本、他に時期不明の自然流路などである。

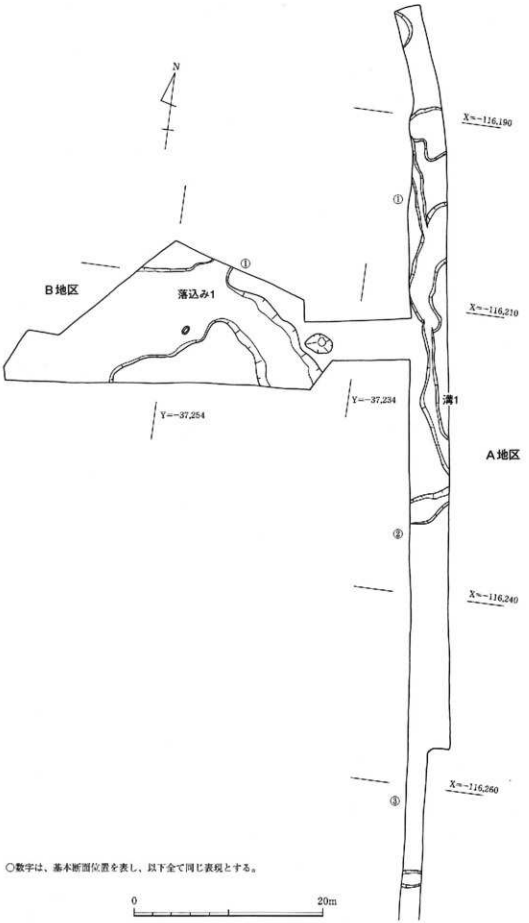
2. 基本層序（第３図、図版１－３）

層序は、地表面に現水田の高低差が存在するものの、基本的に同様な堆積状況を示す。耕作および床土以下は、３層から４層に分けることが出来る。ほぼ水平に堆積し、耕作によるものと考えられる攪拌を受けていることから、水田であった可能性が高い。各層からの出土遺物は、最下層のオリーブ黒色粘質土層まで、中世の遺物が含まれていることから、中世以降水田化されていた可能性が高い。



Ⅰ　耕　　土
Ⅱ　10YR 6/2 灰黄褐色粘質土層（床土）
Ⅲ　25Y 6/3　にぶい黄色粘質砂土層
Ⅳ　10YR 5/2 灰黄褐色粘質砂土層
Ⅴ　5Y 3/2　オリーブ黒色砂質粘土層
Ⅵ　5Y 2/2　オリーブ黒色粘質土層
Ⅶ　25Y 4/2 暗灰黄色粘質砂土層

第３図　田能南遺跡　A地区基本層序図



第4図　田能南遺跡　A・B地区平面図

以下各層の概要を記述する。

Ⅰ層　耕土層で層厚は、約0.2mを測る。

Ⅱ層　耕土層の床土で、基本的に１層であるが、部分的に２層から３層に分けることが出来る。また、部分的に調査区が低湿地に属しており、床土が形成されていない地点もある。

Ⅲ層　にぶい黄色粘質砂土層を基本とする層で、調査区中央から北側に存在する。層厚は、0.1m前後を測る。

Ⅳ層　灰黄褐色粘質砂土層を基本とする層で、調査区全域に広がる。層厚は、0.1mから0.3mを測る。

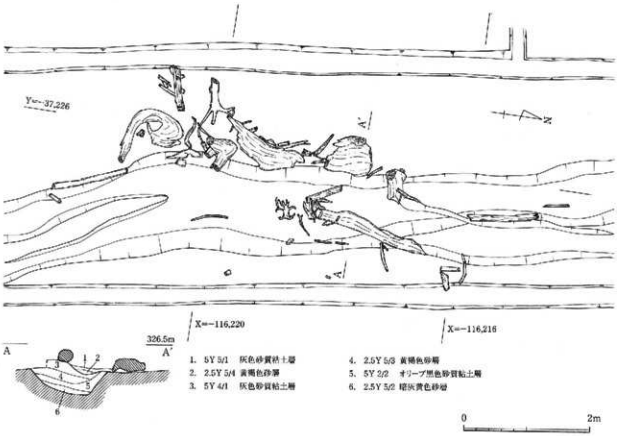
Ⅴ層　オリーブ黒色砂質粘土層を基本とする層で、調査区中央から南側に存在する。層厚は、0.1m前後を測る。

Ⅵ層　オリーブ黒色粘質土層を基本とする層で、調査区全域に広がる。層厚は、0.1m前後を測る。

Ⅶ層　暗灰黄色粘質砂土層を基本とする層で、調査区南側に広がる。層厚は、0.1m前後を測る。

3. 調査の成果

溝１（第５図）　X＝－116,188、Y＝－37,231付近からX＝－116,227、Y＝－37,224付近で検出した基本的に北から南に走る溝である。上面の耕土面にはほぼ同様な方向に走る水田の用水路として使用されている溝が存在する。溝は、若干位置が異なるが、地山面で２回の掘り直しが認



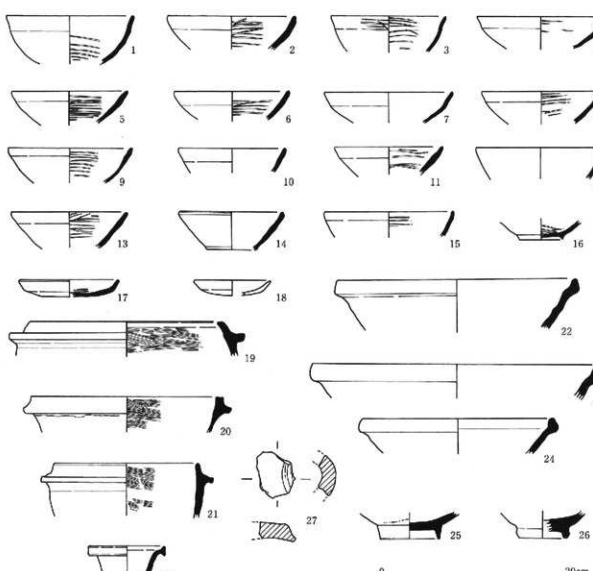
第５図　田能南遺跡　A地区溝１平面・断面図

められる。X＝－116,215、Y＝－37,226付近からX＝－116,221、Y＝－37,226付近の間は、溝の両肩に木材（木切れ）や杭などにより、肩を補強している。これらは、土層観察および平面観察によると新しい溝に属する。溝内には、砂層が全面に堆積していることから常時水が流れていたものと考えられる。溝は、上面が地山面から幅約0.5m、深さ約0.3m、下面が地山面より幅1.0mから1.3m、深さ約0.5mを測る。溝内からの遺物は少量の破片で、図化は出来なかったが、瓦器、土師器片が出土したため、中世と推定される。

4. 出土遺物（第6図、図版11）

調査区の各層から出土した遺物は、12世紀から13世紀中頃にかけてのものと推定される瓦器椀を中心として土師皿、土師器羽釜、青磁碗、白磁碗などがある。

これらの時期の出土遺物として、フイゴの羽口（27）がある。また、これらの時期を溯るものとして平安時代前期の須恵器壺の口縁部（28）がある。



第6図　田能南遺跡　A地区出土遺物（1～28　包含層）

第3節　B地区の調査

1. 調査の概要（第4図、図版1－2・2－3）

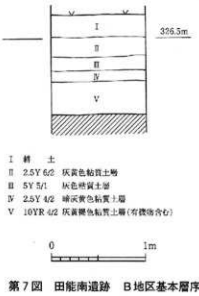
B地区は、A地区のX＝－116,215、Y＝－37,228付近から西に延びる調査区である。調査区は、谷の開口部付近に位置することから、特にこの周辺が軟弱地盤であったため、地山から上層の地盤改良を行うこととなり、用水路用地の他に調査区の一部を拡張したため、歪な形をなしている。東西長約5m、南北幅約5mから最大幅15mを測る。

検出した遺構は、主に自然の落込み内上層から出土した建築部材の集積場と推定される遺構である。それ以外には、調査区内のほぼ全域にわたって辺に切り株、木の根などを多数検出した。

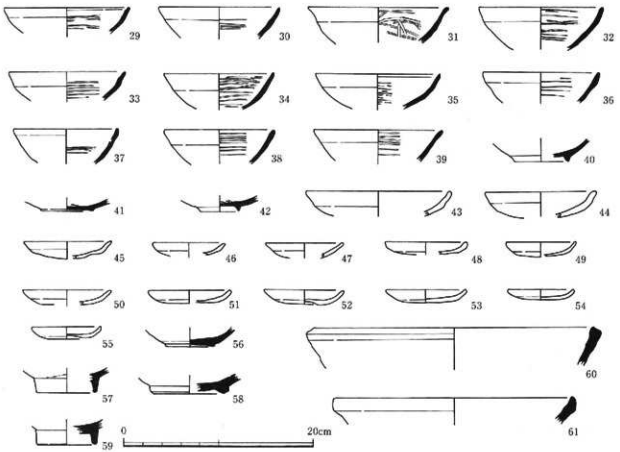
2. 基本層序（第7図、図版1－4）

層序は、地山面から上層が水田であった可能性が高い堆積状況および土質、色調を呈している。各層からの出土遺物は、最下層の灰黄褐色粘質土層まで、中世の遺物が含まれていることから、中世以降水田であった可能性が高い。

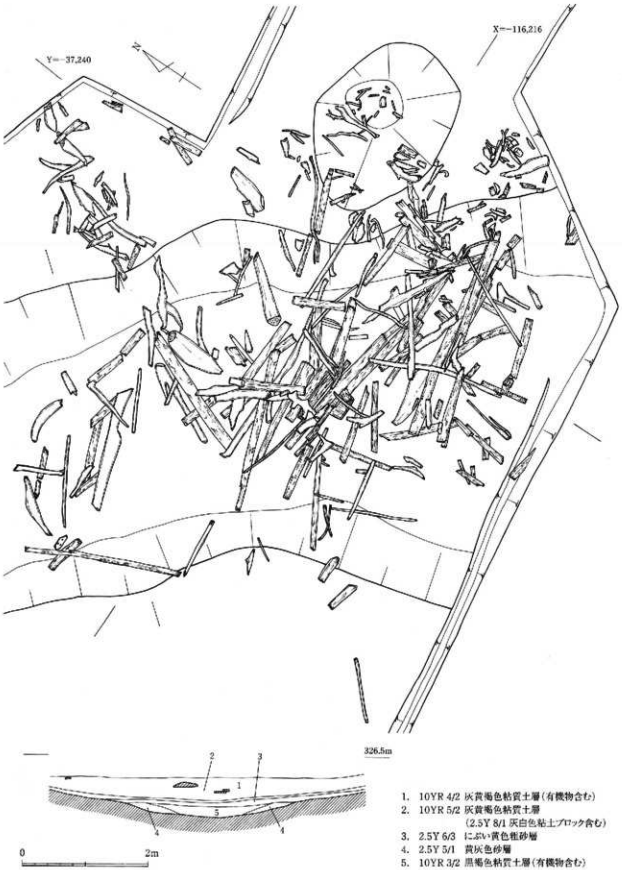
以下各層の概要を記述する。



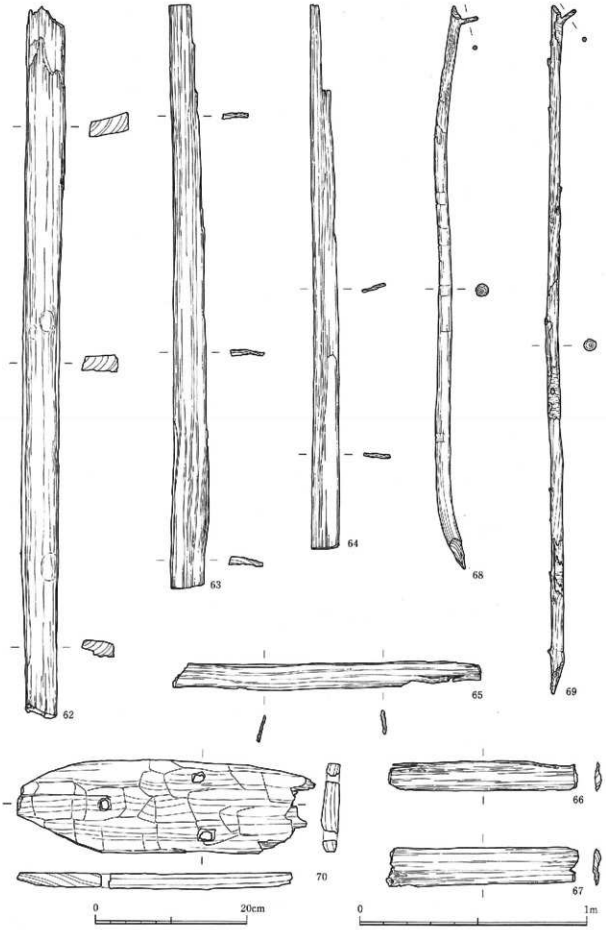
第7図　田能南遺跡　B地区基本層序図



第8図　田能南遺跡　落込み1出土遺跡1（29～61　落込み1）



第9図　田能南遺跡　落込み1遺物出土状況



第10図　田能南遺跡　落込み１出土遺物２（62～70　落込み１）

Ⅰ層　耕土層で層厚は、約0.2mを測る。

Ⅱ層　灰黄色粘質土層を基本とする層で、層厚は、0.2m前後を測る。

Ⅲ層　灰色粘質土層を基本とする層で、層厚は、0.1m前後を測る。

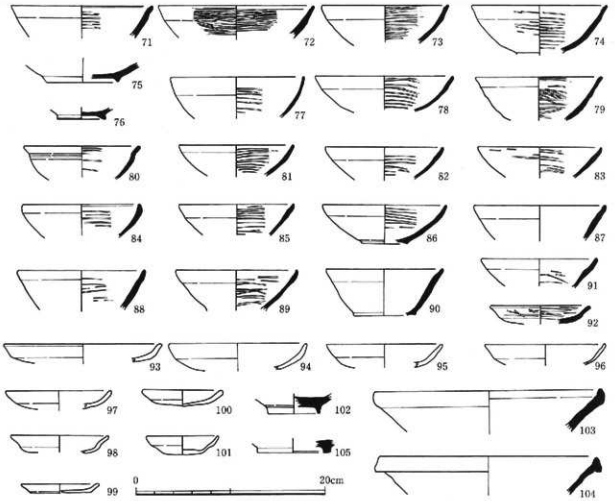
Ⅳ層　暗灰黄色粘質土層を基本とする層で、層厚は、0.1mから0.3mを測る。

Ⅴ層　灰黄褐色粘質土層を基本とする層で、落込み1などの遺構が存在する時期の遺物包含層である。層厚は、0.1m前後を測る。

3. 調査の成果

落込み1（第9図、図版2－1・2）　X＝－116,233、Y＝－37,269付近からX＝－116,220、Y＝－37,241付近にかけて検出した溝状の落込みである。両端は、調査区外に延びる。調査当初は、溝状に延びることから自然流路と思われたが、A調査区で対応する遺構が検出されなかったので落込みと判断した。落込みは、幅6mから10mを測り、X＝－116,213、Y＝－37,246付近までは、深さ約0.1mと緩やかな底部をなしていたが、そこから南は徐々に深くなり、最深部で約0.5mを測る。落込み内の堆積状況は、上層の灰黄褐色粘質土層までは、遺物が混入しているが、それ以下の層には、有機物、砂が堆積し、遺物の存在は全く認められなかった。

上層の灰黄褐色粘質土層から出土した遺物のほとんどは、建築材に使用する以前の木材と推定



第11図　田能南遺跡　B地区出土遺物（71～105　包含層）

されるものであり、その間に瓦器椀、土師器皿、青磁碗、白磁碗、須恵器擂鉢などの土器（第8図、図版11）が混入している。

材木は、落込み上層の灰黄褐色粘質土層中のX＝－116,214、Y＝－37,246付近からX＝－116,220、Y＝－37,240付近の幅約6.5m、長さ約7.0m、厚さ約0.3mの範囲に集中して出土した。この地点は、落込み底面の深さの影響で上層に存在する灰黄褐色粘質土層が厚く堆積し、他の地点より凹レンズ状に堆積している。また、灰黄褐色粘質土層の底面が他の地点より深く、現状からいえば、常時水が存在し、沼状になっていたものと推定される。出土状況は、材木がアトランダムに出土したのではなく、落込みの肩部と垂直に近い方向に配置されていたように見受けられるものが多く、規則性が認められる。

この周辺からは自然木および木の根も多数出土しているが、建築材として認められるものは、総数100点を超える。主なものは板材（第10図－62～67）で、大きいもので長さ約308㎝、幅約16.5㎝、厚さ約7.6㎝（62）、小さなもので長さ約79.4㎝、幅約12.5㎝、厚さ約2.7㎝（66）まで各種存在する。しかしこれらは、丸太材を板材用に割り揃えたのみで、ヤリガンナなどの金属器などによって、きれいに表面を整形したものはない。板材の他に特に注目されるものとしては、何に使用されるかは現在の所不明であるが、先端を杭状に尖らした長さ約291.0㎝、径約5.7㎝を測る長い棒の先を、本体と枝を利用して二股に切り揃えているもの（第10図－68・69）がある。このことから、棒の先端は地中に打ち込み、二股の部分は何かを立掛けるように作られたものではないかと考えている。またこれ以外には、図化はしていないが垂木に使用すると思われる径5.2㎝、長さ309.5㎝を測る棒などがある。

しかし、これらは大きさから柱、梁などの建物の基礎になる大きな部材は見当たらないこと、またこれらは使用痕が全く認められないこと、周辺に自然木は認められるものの、これらを加工した際に出来る木屑が認められないことなどから、これらを建築部材にある程度加工した後、この地点に集められたものと考えている。

配置された時期は、落込み内の土器（第8図、図版11・14）から13世紀前半と推定される。

また、これらより、上層で山下駄（第10図－70）が出土している。

その他の遺構（図版1－2） 調査区内のほぼ全域にわたって木株、木の根などが多数検出された。木株は切り株が多く、自然に枯れたものは少ない。落込みが存在していた当時は、木が周辺に生い茂っていた可能性が高く、これより上層は、水田の可能性が高い土質、色調を呈していることから、この周辺を水田化するために、木を伐採したものと考えている。

4. 出土遺物（第11図、図版12）

遺構以外からの出土遺物は、中世のものが大半を占め、瓦器椀、瓦器小皿、土師器皿、土師器小皿、須恵器擂鉢、青磁碗、白磁碗などがあり、時期は12世紀後半から13世紀後半と推定される。それ以外には、平安時代前期（9世紀）と推定される杯身（105）がある。これらは、地形から谷の北側縁辺部から流れ込んだものと推定される。

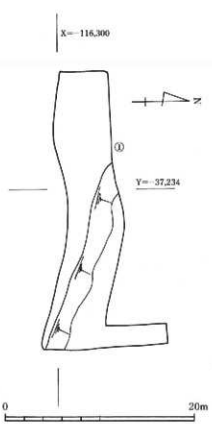
第４節　Ｃ地区の調査

Ｃ地区（第12図）は、Ａ地区の南側に存在し、遺跡の南東端付近にあたる。基本的には東西方向に長い調査区である。調査区は、地形的には谷の開口部、南西方向から派生する丘陵の縁辺部付近のＸ＝－116,300、Ｙ＝－37,247付近からＸ＝－116,289、Ｙ＝－37,217付近に位置し、長さ約30m、幅約５ｍを測る。

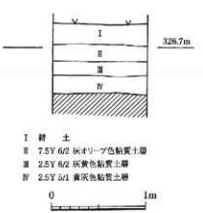
基本層序（第13図）は、堆積層の厚さの違いは認められるものの、地山から耕土層までは、Ａ・Ｂ両地区に存在する層と同様にほぼ水平に堆積し、土質、色調も極めて酷似している。ただ調査区が丘陵の縁辺部にあたることにより、地山が南側に行くに従い高くなり、各層が徐々に収束し南西端では耕土層のみとなる。

当該地区は、土層断面観察の結果、Ａ・Ｂ両地区と同様、中世以降水田であったものと推定され、遺構は、南西方向から延びる丘陵の縁辺部付近の落ちを確認したのみで、全く存在しなかった。

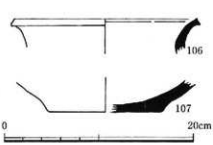
遺物（第14図）は、少量でⅢ・Ⅳ層中より出土した。出土した遺物は、西側に存在する中世と推定される遺構からのものと考えられ、種類は瓦器椀、土師器皿、土師器羽釜、須恵器擂鉢、甕片などであるが、細片が多く図化出来たのは２点のみであった。



第12図　田能南遺跡　Ｃ地区平面図



第13図　田能南遺跡　Ｃ地区基本層序図



第14図　田能南遺跡　Ｃ地区出土遺物
（106・107　包含層）

第5節　D地区の調査

1. 調査の概要（第15図、図版3－1・2）

D地区は、谷の南側、西から東に延びる丘陵の縁辺部付近に位置し、C地区とE地区に挟まれた東西に細長い調査区で、当該遺跡内では、集落が営まれるには最も地形的には適している地区と考えられる。

調査区は、X＝－116,312、Y＝－37,359付近からX＝－116,307、Y＝－37,286付近までの東西長約73m、南北幅約6mを測る。調査区は、西から東に緩やかに下る谷の南側縁辺部付近に存在するため、西端と東端との地山面での標高差は2.5m存在する。

検出した遺構は、建物4棟、土坑1基、杭列2基、溝、建物に伴わない柱穴などである。

2. 基本層序（第16図、図版3－3・4）

層序は、東西長約73mの細長い調査区にもかかわらず、近世から近代にかけて水田造成時に削平ないしは盛土を行っているが、地形の変化や若干の土質の違いは認められるものの、本来はほぼ同様な堆積状況を示しているものと推定される。

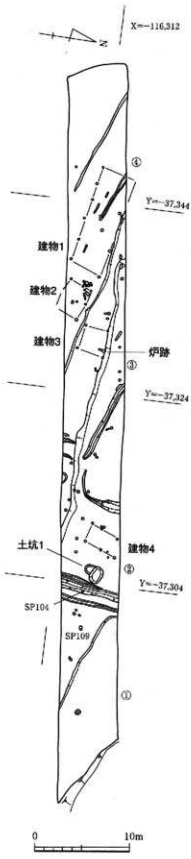
以下、各層の概要を記述する。

Ⅰ層　耕土層で層厚は、約0.2mを測る。また、調査区の一部に存在するⅠ'層は、旧耕土層で、層厚0.2mを測る。

Ⅱ層　褐色粘質土層を基本とする層で、当該地区の床土層である。層厚は、0.1m前後を測る。また、調査区の一部に存在するⅡ'層は旧床土層である。

Ⅲ層　にぶい黄褐色砂質粘土層を基本とする層で、当該地区の遺物包含層であるⅣ層とほぼ同系統の土質、色調を呈していることから丘陵上部よりその土が流れ、堆積したものと考えている。層厚は、0.05mから0.2mを測る。部分的に2層に分かれる地点も存在する。

Ⅳ層　灰黄褐色砂質粘土層を基本とする層で、当該地区の平安時代から中世までの遺物を包含する層である。層厚は、0.05mから0.2mを測る。



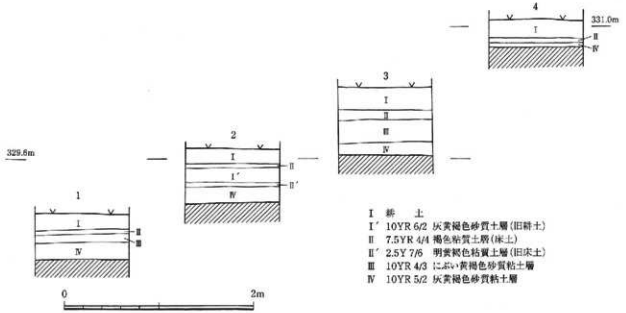
第15図　田能南遺跡　D地区平面図

3. 調査の成果

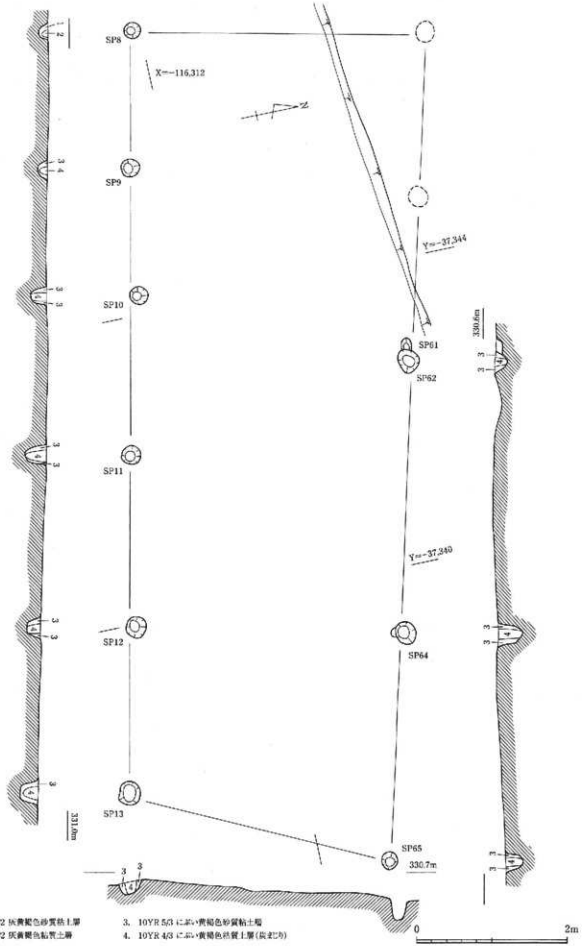
建物1（第17図、図版3－2・図版4－1～7） 建物2、建物3とでひとつの屋敷地を構成すると考えられるもので、北側の桁行の一部は調査区外にある。建物は、X＝－116,312、Y＝－37,342付近を中心とする基本的に梁間1間（東側約3.5m）、桁行5間（南側約10.05m）を測る。しかし、北側の桁行の一部が調査区外にあるため全容は不明であるが、南側のものとでは、柱間の間隔が広いことから、柱穴の数が1本少なく4間と推定される。また、東端で梁間と桁行が揃わず、0.8m程度北側が長い。柱間は、南側は、1.8mから2.1m、北側は、3.0mから3.5mを測る。柱穴は円形に近い形を呈し、径0.3m前後、地山面からの深さ0.15mから0.3mを測る。柱痕は、土層断面観察の結果、径0.1m前後を測る。柱穴内からは、SP65から黒色土器底部（第22図－108）が出土している。建物の時期は、出土遺物から平安時代中期と推定される。

建物2（第18図、図版4－8） 南側の一部が調査区外にあり、建物1と約1m東に離れほぼ同方向に接して建てられている。規模が建物1より小さいことから建物1に付随する施設と考えられる。梁間1間（約2.4m）、桁行2間（3.4m）を測るが、桁行の中央の柱穴が0.1m程度外側に張り出している。このことから桁と梁が異なる可能性がある。柱穴は円形に近い形を呈し、径0.2mから0.3m、地山面からの深さ0.15mから0.3mを測る。柱痕は、土層断面観察の結果径0.1m前後を測る。

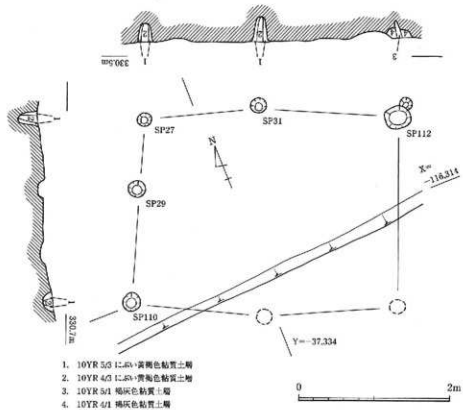
建物3（第19図） 建物2の北東側、X＝－116,311、Y＝－37,329付近を中心とする建物で、炉跡1を覆う位置に存在していることから、これに付随する施設と推定される。建物の北側が削平を受け、段になっているため規模は不明である。梁間1間（約2.5m）、桁行1間（2.9m以上）を測り、西側の桁と梁が直行していないこと。柱穴は、径約0.15m前後、深さ約0.1m前後と、今



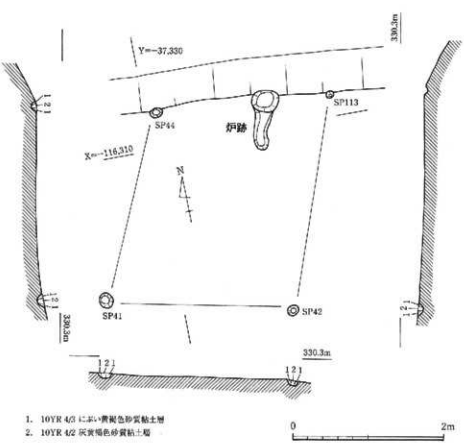
第16図 田能南遺跡 D地区基本層序図



第17図　田能南遺跡　D地区建物1平面・断面図



第18図　田能南遺跡　D地区建物２平面・断面図



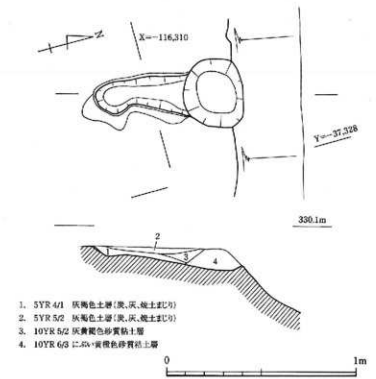
第19図　田能南遺跡　D地区建物３平面・断面図

回検出した他のものと比較して小規模で、柱痕は、土層断面観察の結果、径0.05m前後を測る。これらのことから小屋状の覆屋といったものを想定している。

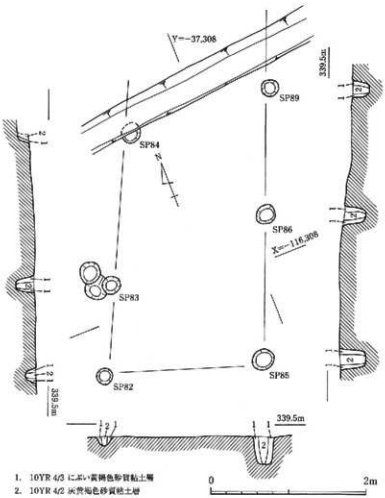
また、建物１・２と建物の軸がほぼ同方向のため、現在の所これらに伴うものと考えているが、柱穴内から遺物が全く出土していないため不明な点が残る。

炉跡１（第20図）

X＝−116,310、Y＝−37,328.5付近を中心とする。これには、前述した建物３が付随すると考えている。炉跡は、北側が削平を受け斜面となっているため欠失している。長さ0.8m以上、幅は北側で約0.35m、南の先端付近で丸くなり約0.15mを測る。炉の壁面から底面のほとんどは、高熱を受け、厚さ約0.01mから0.03m程度赤変しているが、北側の



第20図　田能南遺跡　D地区炉跡平面・断面図

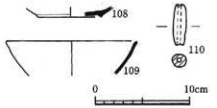


第21図　田能南遺跡　D地区建物4平面・断面図

約0.3mの間は平面形では径0.3m前後、地山面からの深さ約0.1mを測る土坑状の落込みをなし、壁面は赤変していない。土層断面観察では、炉の本体と考えられる部分は、この周辺で立ち上がっており、用途は不明であるが、炉築造時には土坑状に掘られたが、使用時には、埋められていたものと考えている。

高熱を伴う作業をしていたものと推定されるが炉跡内及び炉の周辺からは、鉱滓などが全く出土していないため用途は不明である。

建物4（第21図）　建物は、X＝−116,308、Y＝−37,309付近を中心とし、北側が調査区外に延びる。基本的に梁間1間（2.0m）、桁行2間（3.5m）以上を測る建物である。梁の柱間2.0m、桁行きの柱間は異なり、1.2mから1.8mを測る。柱穴は円形に近く、径0.2m前後、深さ0.15mから0.35mを測る。柱痕は、土層断面観察の結果、径0.1m前後を測る。柱穴内からは、遺物は出土しなかったが、周辺からの出土遺物から中世と推定される。



第22図　田能南遺跡　D地区遺構出土遺物
（108　SP65、109　SP104、110　SP109）

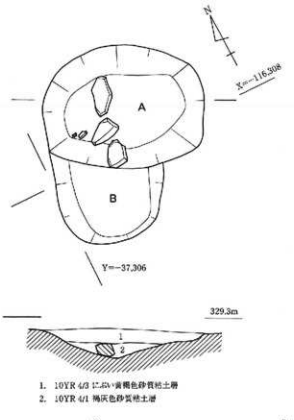
土坑１（第23図） 建物４の東側、X＝－116,308、Y＝－37,305付近を中心とする。土坑は２基存在しほぼ同一地点で切り合っていたため検出面上面では、同一のものと判断して掘削した。土坑は、土層断面観察の結果、土坑１－Aが古く、土坑１－Bが新しい。土坑１－Aは、平面形では楕円形に近い形を呈し、長径約1.7m、短径約1.3m、深さ約0.3m、土坑１－Bは、平面形では楕円形に近い形を呈し、長径約1.2m以上、短径約0.7m、深さ約0.1mを測る。土坑内からの遺物は少量で、瓦器、土師器の細片が出土したが、図化出来なかった。

その他の遺構 その他の遺構として図化はしていないが、多数の杭跡が検出された。杭跡は、D地区ほぼ全域にわたって検出された。特に斜面に沿って地山面を整形し、段を作っている地点が２ヶ所存在し、その周辺に集中し並んで検出された。埋土が褐色を呈していることから中世以前のものと推定しているが、用途は不明である。

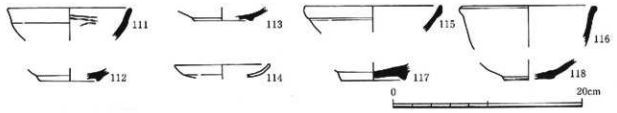
4．出土遺物

D地区には、厚さ0.05mから0.2mを測る遺物包含層相当層が存在するが、他の地区と比較すると遺物は少量（第24図、図版12）であった。出土した遺物は、瓦器椀、土師器小皿、青磁碗、白磁碗など中世のものが大半を占めるが、当調査区で検出した主な遺構の時期と考えられる平安時代と推定される、黒色土器椀、須恵器杯身、須恵器椀なども少量ながら出土している。

これらの中でSP109内から出土した土錘（第22図－110、図版12－110）は、注目に値する。田能盆地内には、小河川の田能川が流れているが、川幅が狭く、そこで川魚を獲るための網などの道具の一部としてこれが使用されていたとは考えにくく、鳥などから農作物を守るための網の錘として使用されたと考えた方が妥当であると考えている。



第23図 田能南遺跡 D地区土坑１平面・断面図



第24図 田能南遺跡 D地区出土遺物（111～118 包含層）

第６節　Ｅ地区の調査

1. 調査の概要（第27図、図版５－１）

Ｅ地区は、Ｄ地区の西側、谷の先端付近のＸ＝－116,312、Ｙ＝－37,411付近からＸ＝－116,304、Ｙ＝－37,359付近までの東西長約53m、南北幅約６mを測る調査区で、地形的には東側半分は丘陵縁辺部、西側は谷部となる。検出した遺構は、櫛列、自然流路などである。

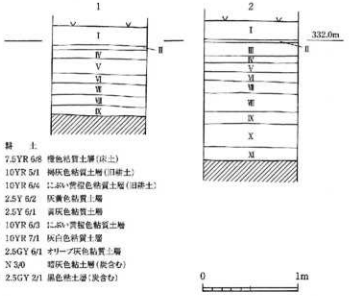
2. 基本層序（第25図、図版５－３）

当該調査区は、耕土層以下地山直上層まで盛土層で、層中より中世の遺物の他に近世の遺物（第26図、図版12）が出土している。

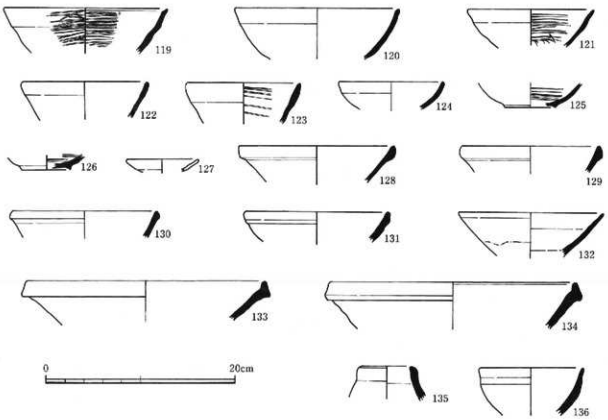
以下、各層の概要を記述する。

Ⅰ層　耕土層で層厚は、約0.2mを測る。

Ⅱ層　橙色粘質土層を基本とする層で、当該地区の床土層であ



第25図　田能南遺跡　Ｅ地区基本層序図



第26図　田能南遺跡　Ｅ地区出土遺物（119～136　包含層）

る。層厚は、0.1m前後を測る。

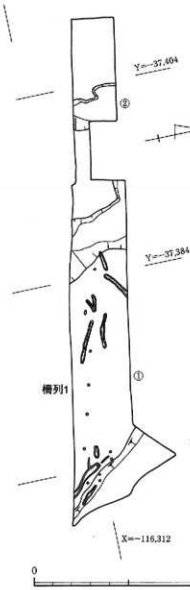
Ⅲ層～Ⅸ層　近世と推定される盛土層で、各層はほぼ水平に堆積し、若干異なる土砂をほぼ水平に敷き詰めている。層厚は、0.1m前後、盛土全体の厚さは、約0.7m前後を測る。

Ⅹ層　流路上層の堆積層で、暗灰色粘土層を基本とする。層厚は、約0.25mを測る。

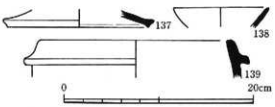
Ⅺ層　流路の堆積層で、黒色粘土層を基本とする。層厚は、約0.2mを測る。

3. 調査の成果

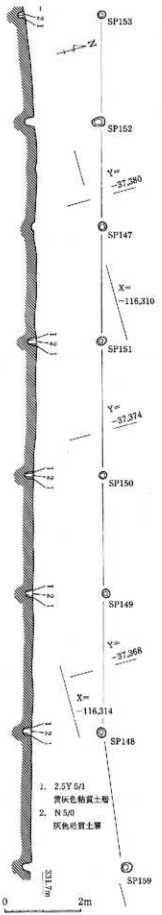
柵列1（第29図、図版5－2・4～7）　調査区の東側X＝－116,308、Y＝－37,385付近からX＝－116,314、Y＝－37,363付近の平坦面に存在し、全長約21.6mを測る東西方向に延びる柵列である。その中に8本の柱穴が存在し、柱間は、2.5mから3.5mを測る。柱穴は、径約0.2m前後で、深さ0.2m前後、柱痕は、0.1m前後を測る。遺物は、SP159（第28図）内より近世陶器が出土している。柵列の用途は、調査区が南北約6mと狭い為不明であるが、土層の前後関係から、この周辺が盛土によって耕地化される以前のものである。



第27図　田能南遺跡　E地区平面図



第28図　田能南遺跡　E地区遺構出土遺物
（137～139　SP159）



第29図　田能南遺跡　E地区
柵列1 平面・断面図

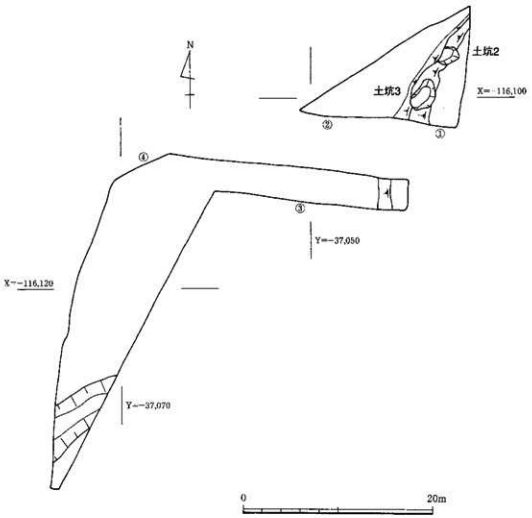
第7節　F地区の調査

1. 調査の概要（第30図、図版6－1）

F地区は、平成11年度の遺跡確認調査で、田能北遺跡の範囲に新たに加えられた地域である。しかし今回は、調査区が田能南遺跡に隣接していることから一連のものであることとして捉え、F地区として調査を実施した。地形的には、田能川東岸の東から西に派生する丘陵の縁辺部から田能川の河岸段丘面上に存在する。調査区の範囲は、遺跡の範囲拡大された地域の大半を占め、X＝－116,090、Y＝－37,033付近からX＝－116,141、Y＝－37,077付近までの東西長約44m、南北長約52mの範囲内にある。

調査は、切土によって遺構が破壊される地点に限定して実施していることから、調査区は平面形では、三角形に近い形が2ヶ所存在しているような形状を示し、地形的には調査区内に存在する各水田の段差により、上段、中段、下段に分けることが出来る。

調査区内で検出した遺構は、周辺を水田化された時点において削平を受けたものと推定され、土坑2基、自然流路と極めて少ない。



第30図　田能南遺跡　F地区平面図

2. 基本層序（第31図、図版６－３・４）

調査区内の層序は、土層断面観察の結果、基本的に盛土の部分と切土部分に分けることできる。上段は切土、中段は盛土、下段は切土によって水田が造成されているものと推定される。

以下、各層の概要を記述する。

Ⅰ層　耕土層で層厚は、約0.2mを測る。

Ⅱ層　床土層で、灰黄褐色粘質砂土層を基本とする。部分的に２層存在する箇所も存在する。層厚は、0.1mを測る。

Ⅲ層　調査地区の上段から中段にかけて存在する層で、にぶい黄褐色砂質粘土層を基本とする。層厚は、0.1mから0.2mを測る。

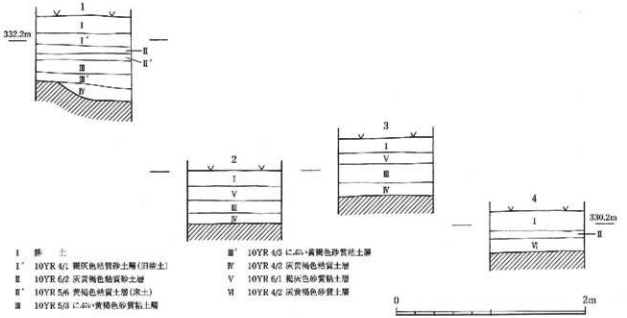
Ⅳ層　調査地区上段から中段にかけて存在する層で、灰黄褐色粘質土層を基本とする。層厚は、約0.2mを測る。

Ⅴ層　調査地区中段に存在する水田造成時の盛土層で、褐灰色砂質粘土層を基本とする。層厚は、0.2mから0.3mを測る。

Ⅵ層　調査地区下段に存在する層で、灰黄褐色砂質土層を基本とする。近世までの遺物を含む。層厚は、0.15m前後を測る。

3. 調査の成果

土坑２（第32図、図版６－２）　調査区北東側、X＝－116,096、Y＝－37,036付近を中心とする。遺構は、調査区の上段から中段にかけての斜面上に存在し、土坑の南側約２mには土坑２がある。土坑の西側は、水田が造成された際に削平を受け、肩部が存在しない。土坑の平面形は、円形に近い形をしていたものと推定され、東西長約1.7m以上、南北幅約2.0m、最大深さ約0.35mを測る。遺物は、土坑内から黒色土器の細片が出土したが図化できなかった。



第31図　田能南遺跡　Ｆ地区層序図

時期は、出土遺物から平安時代と推定される。

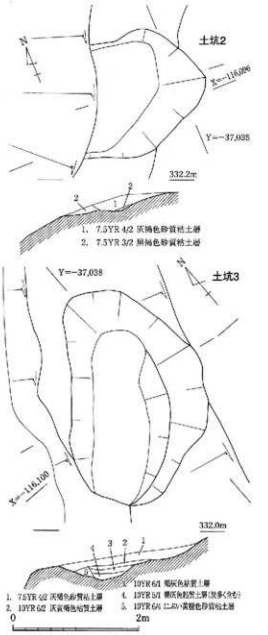
土坑３（第32図、図版６－２） 調査区北東側、X＝－116,100、Y＝－37,038付近を中心とし、調査区の上段から中段にかけての斜面上に存在する。土坑の南西側は、水田が造成された際に削平を受けたものと推定され、肩部が存在しない。土坑の平面形は、楕円形に近い形をしていたものと推定される。土坑は、東側の一部が２段になっており、長径約3.4m以上、短径幅約2.1m、最大深さ約0.35mを測る。遺物は、土坑内から、黒色土器の破片が出土したが図化できなかった。

時期は、出土遺物から平安時代と推定される。

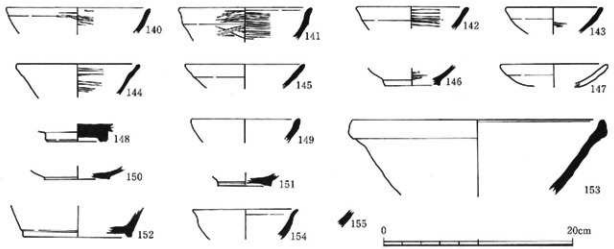
4. 出土遺物（第33図、図版12）

Ｆ地区から出土した遺物の量は、他の調査区と比較すると多くはない。遺物の種類は、瓦器椀（140～146）、土師器小皿（147）、青磁碗（148）など他の調査区同様平安時代末期から中世にかけての遺物が大半を占める。しかし、須恵器椀（149～151）、須恵器杯身（152）、緑釉陶器（154、155）などのように、平安時代前期から中期にかけての遺物が、他の調査区に比べ、比較的多く出土している。

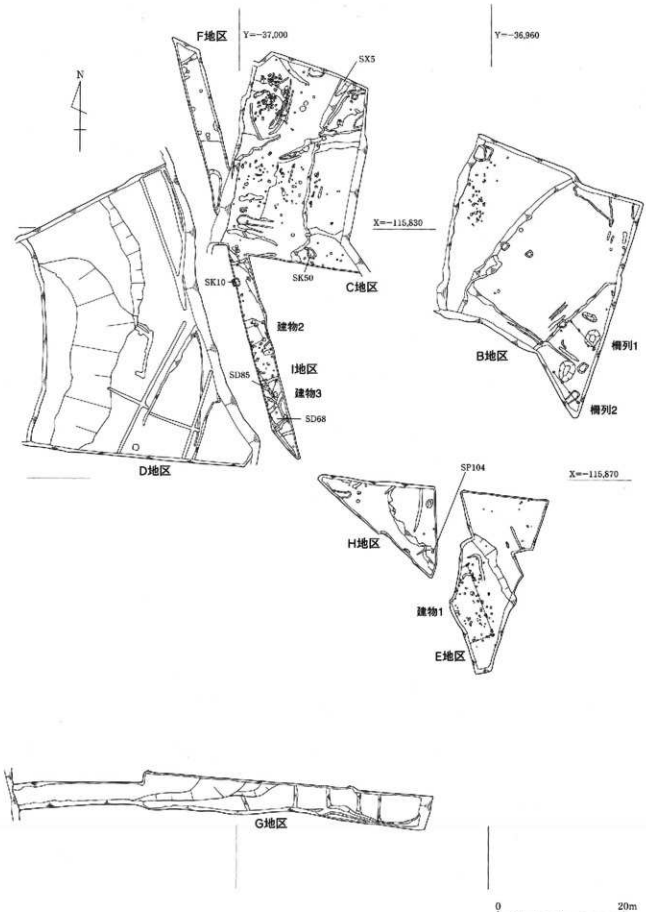
このことから調査区東側の丘陵縁辺部周辺現集落状上には、中世の他に平安時代前期から中期にかけての遺構が存在する可能性が高い。



第32図 田能南遺跡 Ｆ地区土坑２・３平面・断面図



第33図 田能南遺跡 Ｆ地区出土遺物（140 SK201、他 包含層）



第34図　田能北遺跡　平面図

第３章　　田能北遺跡の概要

1. 概要（第２・34図、図版７－１・２）

田能北遺跡は、基本的に田能盆地北側の田能川左岸に広がる遺跡で、遺跡の大半は田能川左岸の丘陵縁辺部周辺に存在する。遺跡の規模は、東西長約120m、南北幅約300mを測る。調査は、圃場整備に伴って遺構が破壊される部分に限定して行った。

調査は、平成11年度に実施した田能北遺跡Ａ地区を加え、地区毎にＢからＩまでの８調査区に分けて実施し、調査面積は、約2950㎡を測る。今回の調査区のほとんどは、東の山塊から西の田能川に向って下る同一丘陵内に存在する。

検出した遺構は、建物３棟、柵列２本、土坑12基、井戸１基、溝、火葬施設跡１基、柱穴などある。

この項では、今回の調査で検出した主な遺構・遺物について記述し、全容については改めて報告する予定である。

2. 基本層序（第35図、図版７－３～５）

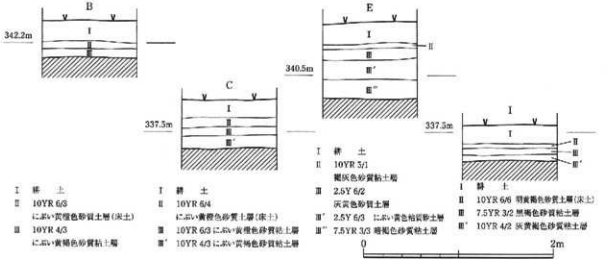
ここでは、今回調査の概要を報告するＢ、Ｃ、Ｅ、Ｉの４地区の基本層序を記述する。記述した地区の層序は、層厚、色調、土質の違いはあるもののほぼ同様な堆積状況を示している。

層序は、基本的に上層から耕土層（Ⅰ層）、床土層（Ⅱ層）、遺物包含相当層（Ⅲ層）の順となる。

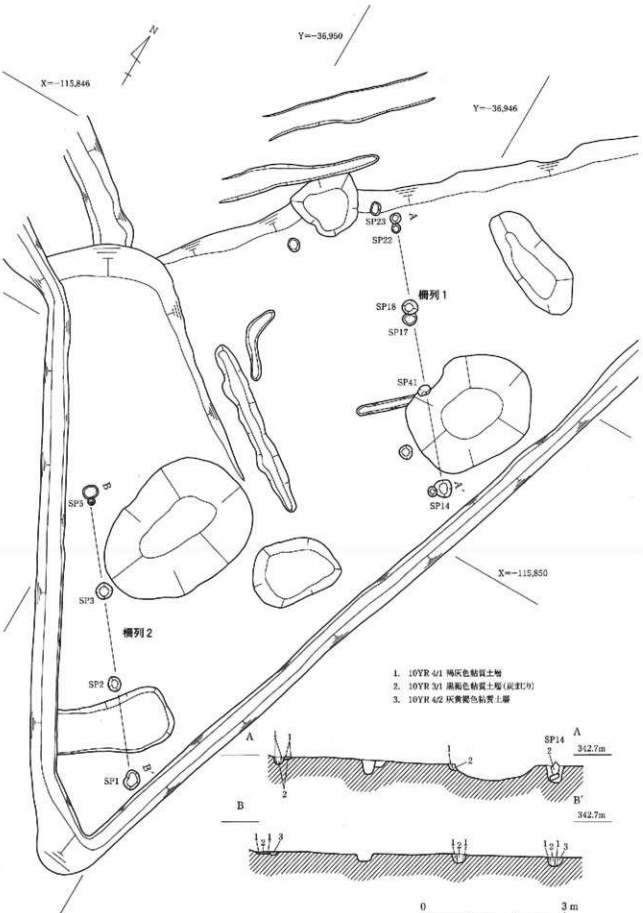
以下、各層の概要を記述する。

Ⅰ層　耕土層で層厚は、0.2m前後を測る。

Ⅱ層　床土層で、黄褐色系砂質土層を基本とする。部分的に２層存在する箇所も存在する。層厚は、0.1m前後を測る。



第35図　田能北遺跡　基本層序図



第36図　田能北遺跡　B地区南東部平面・断面図

Ⅲ層　褐色系の砂質粘土層を基本とする。今回報告する調査地区の遺物包含層である。層厚は、0.1mから0.2mを測る。

3. B地区の調査（第36図）

概要　B地区は、今回調査を実施した地区の中では最も高所に位置する。調査区のほとんどは、水田造成時に削平を受け、旧地形が欠失している。遺構が残存していたのは、削平を受けていない調査区の東南部周辺が最も多い。検出した遺構は、柵列2本、土坑5基、火葬施設1基、柱穴群、溝などである。

柵列1　調査区の東南側X＝－115,845、Y＝－36,947付近からX＝－115,849、Y＝－36,944付近に存在し、北西から南東方向の調査区外に延びる柵列である。その間に4本の柱穴が存在し、検出長5.7m、柱間は、1.8mから2.2mを測る。柱穴は、径約0.3m前後で、深さ0.2mから0.3m前後、柱痕は、0.1m前後を測る。

遺物は、SP14内より土師器小皿（第37図－156）が出土していることから平安時代中期（11世紀）と推定される。

柵列2　調査区の東南端X＝－115,853、Y＝－36,950付近からX＝－115,858、Y＝－36,946付近に存在し、北西から南東方向の調査区外に延びる柵列である。その間に4本の柱穴が存在し、検出長6.1m、柱間は、2.0mから2.1mを測る。柱穴は、径約0.3m前後で、深さ0.05mから0.2m、柱痕は、0.15m前後を測る。

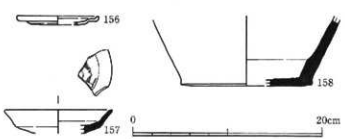
柵列の東南側と南東側が調査区外と隣接しているため不明な点が多いが、柵列1とほぼ同方向であることから、柵列1に対応する建物である可能性も大いにある。

柱穴内から遺物は出土しなかったが、柵列1とほぼ同方向であることから、平安時代中期（11世紀）と推定される。

4. C地区の調査（第38図、図版8－1）

概要　C地区は西側の丘陵縁辺部に存在する。検出した遺構は、建物群1ヶ所、土坑、溝、建物にはならない柱穴などである。

建物群（第38図、図版8－1・2）　調査区の北西端のX＝－115,808、Y＝－36,994付近を中心に存在し、遺構は小溝群と柱穴群によって構成される。東の斜面側に幅約0.1mから0.2m、深さ約0.05m前後の小溝が、内側にやや弧を描くように9本以上切りあって存在し、その内部に96個以上の柱穴が確認された。柱穴の並びから、何棟かの建物が存在すると思われるが、それ以降に出来た溝などによって周辺の遺構面が削平を受けているため何棟の建物が存在するかは不明である。ただ東の斜面側に掘られた小溝が、雨を防ぐ溝とすれば、9棟前後の建物が存在することになろう。



第37図　田能北遺跡　B地区出土遺物（156　SP14、他　包含層）

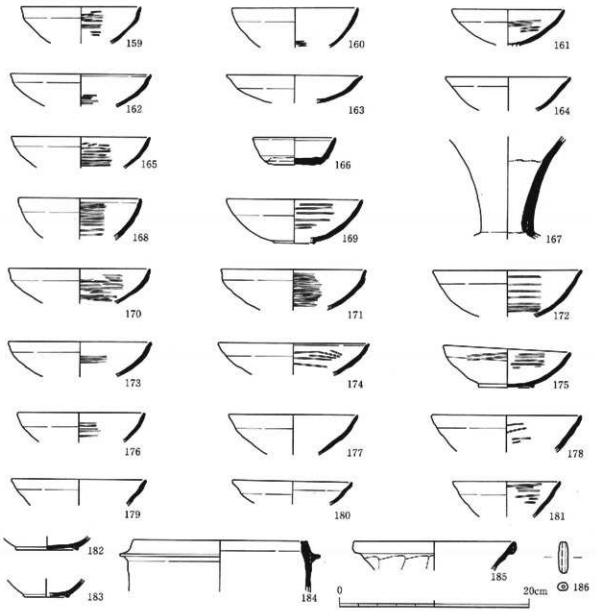
第38図　田能北遺跡　C地区建物群平面・断面図

建物群の時期は、柱穴内の遺物が少量で図化が出来るものはなかったが、周辺の遺構、遺物包含層から出土した遺物（第39図、図版13・14－166・169・175）から、12世紀後半から13世紀初頭にかけてのものと推定される。

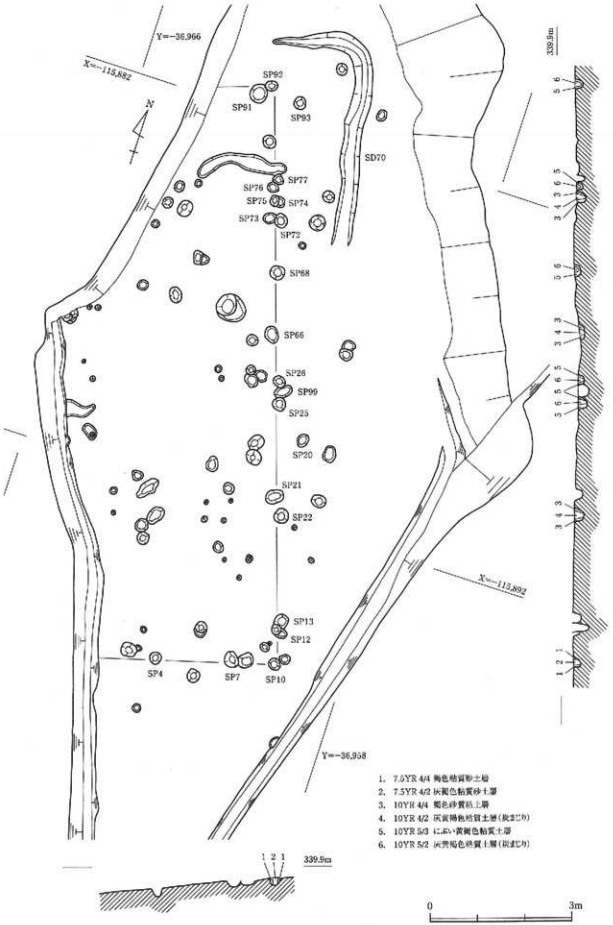
5. E地区の調査（第40図、図版9－1～7）

概要　E地区は、丘陵南側の縁辺部付近に存在する。調査区は、地形の変化により上段と下段とに分けることが出来る。遺構は、下段に集中して検出されており、検出した遺構は、建物1棟、溝、建物にはならない柱穴多数などである。

建物1（第40図）　建物1は、下段のX＝－115,890、Y＝－36,962付近に存在する。建物は、梁間1間（約2.5m）以上、桁行5間（12.2m）と推定されるが、南側から南西側の約2分の1が調査区外にあるため不明な点が多い。桁行及び梁間に同方向に並ぶ柱穴があり、2回以上の建て替えがあったものと考えられる。桁行の柱間は、1.9mから3.1m。梁間の柱間は約2.5mを測る。



第39図　田能北遺跡　C地区出土遺物（159～165　SX5、166・167　SK50、168・169　SD106、他　包含層）



第40図　田能北遺跡　E地区建物1平面・断面図

柱穴は円形に近い形を呈し、径0.2mから0.3m、地山面からの深さ0.15mから0.2mを測る。柱痕は、土層断面観察の結果、径0.15m前後を測る。

建物の時期は、柱穴内、他の遺構、遺物包含層から出土した遺物（第41図、図版13・14－187・188）などから平安時代後期（11世紀）と推定される。

また、建物西に存在する段は、当初水田造成時に築造されたと考えていたが、建物と同方向に延びていること、段の近くまで遺構が存在していることなどから同時期のものと考えている。

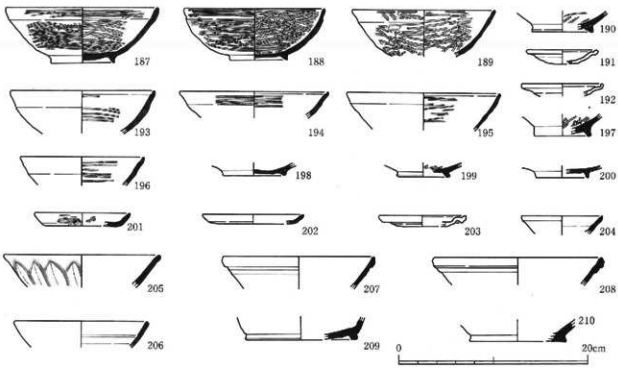
6. Ⅰ地区の調査

概要　Ⅰ地区（図版９－８）は、西側から南西側の丘陵縁辺部にC地区と接して存在する。検出した遺構は、建物２棟、土坑、溝、建物にならない柱穴などである。

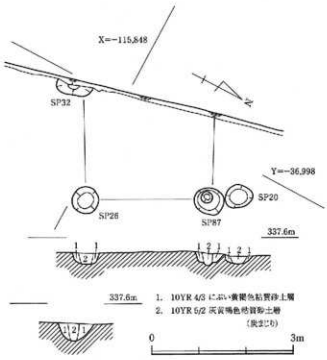
建物２（第42図、図版10－５～８）　調査区の中央付近、X＝－115,848、Y＝－36,997付近に存在する。建物は、梁間１間（約2.6m）、桁行１間（2.6m）以上と推定されるが、西側のほとんどが調査区外にあるため不明な点が多い。桁行の柱間は、約2.6mを測る。柱穴は円形に近い、今回までの調査で検出した柱穴の中では最も大きな部類に属し、径0.6mから0.8m、地山面からの深さ0.2mから0.4mを測る。柱痕は土層断面観察の結果、径0.3m前後を測る。

建物の時期は、柱穴内から全く遺物が出土しなかったこと、他の遺構内、遺物包含層からも、建物の時期に相当するような遺物が出土しなかったことなどから不明な点が多いが、柱穴の規模、建物１・２との比較などから考えると、平安時代中期（10世紀）頃が妥当ではないかと考えている。

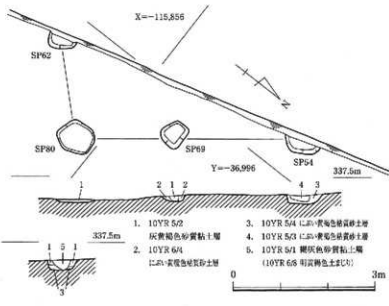
建物３（第43図、図版10－１～４）　調査区の南東側、X＝－115,856、Y＝－36,995付近に存



第41図　田能北遺跡　E・H地区出土遺物（187　SP93、188　SP20、189　SD70、190　SP104、191　SP66、192　SP75、他　包含層）



第42図　田能北遺跡　Ⅰ地区建物２平面・断面図

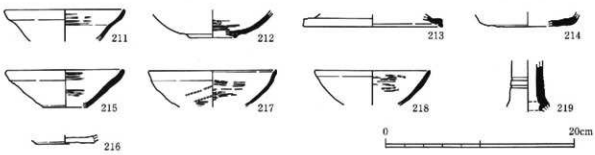


第43図　田能北遺跡　Ⅰ地区建物３平面・断面図

在する。建物は、梁間１間（2.2m）以上、桁行２間（4.8m）以上と推定されるが、西側のほとんどが調査区外にあるため不明な点が多い。桁行の柱間は、2.1mから2.8m、梁間の柱間は約2.2mを測る。柱穴は楕円形ないしは長方形に近い形を呈し、今回までの調査で検出した柱穴の中では、このような形状のものは全く無い。長径0.6mから0.8m、短径約0.5mから0.7m、地山面が削平を受けたものと推定され、深さ0.05mから0.2mと浅い。柱痕は、土層断面観察の結果、径0.2mから0.4m前後を測る。

建物の時期は、柱穴内から全く遺物が出土しなかったため不明な点が多いが、建物に対する柱穴の方向が揃っていないこと、周辺の瓦器を伴う遺構、遺物包含層内から出土した遺物（第44図、図版14）の中に、須恵器杯蓋（213）、須恵器杯身（214）、須恵器壺（219）などが認められることから、平安時代初期頃（９世紀）と考えている。

このことから、建物３は、田能地区内で検出した遺構の中では、最も古く、この周辺を開発し始めた時期のものと考えている。



第44図　田能北遺跡　Ⅰ地区出土遺物（211～214　SD68、215　SK10、216　SD85、他　包含層）

第4章 ま と め

これまでの調査で、検出した遺構・遺物の中で、最も遡れるものは、田能城跡（1999年度調査）から出土した、縄文時代と推定される石鏃であるが、それ以外にその時代と目されるものは検出されていない。それ以降、この地に人々が定住し始めたのは、平安時代に入ってからであると考えている。

特に、平成13年度に実施した田能北遺跡E、I地区からは建物跡を3棟確認している。I地区で確認した建物3は、柱穴内からの出土遺物はなかったものの、周辺の遺構、遺物包含層からの遺物および柱穴の形状などから平安時代初期（9世紀）まで遡れるものと考えている。また、遺構は検出されていないものの、これら以外の地区においても遺物包含層中より、僅かながら須恵器、黒色土器、緑釉陶器などの破片が少量ながら出土している。このことから小規模ながら集落が平安時代初期から、田能盆地内の丘陵縁辺部に点在していたものと推定される。

本格的に集落が営まれ出したのは、中世に入ってからと考えられる。田能盆地内の発掘調査、遺跡確認調査の結果及び地形から当時の集落は、盆地の周囲の丘陵端部に沿ってほぼ帯状に存在していたものと想定され、大部分は、周知の遺跡範囲外の現集落とほぼ重なるものと考えられる。

当時の田能地区は、鎌倉時代初期には、丹波国桑田郡田能荘に属し、七条院（後鳥羽院の母）領の38箇所のひとつで12世紀院政期に形成された膨大な皇室領荘園群の一つであった。高槻市史によると当時の田能庄の庄域は、田能、中畑、二料、杉生、出灰の地域であったとされる。また、平安時代末期の貞応2年（1224）に書かれた田能庄鎮守樫船神社の棟札[注1]には、庄園は、田能庄百姓（名主百姓）とそれに数倍する小百姓から構成されていると考えられている。これから多くても40家族前後が、平地面積が最も広い田能盆地を中心に居住していたものと想定している。

また、田能南遺跡（2000年度調査）では、当時水田の可能性がある谷部の調査（A・B・C地区）を行い、建築材の集積場、水田に水を引く用水路と推定される溝などの遺構を検出したが、遺物は出土するものの、直接集落に結びつける遺構は、検出できなかった。

この地区の土層断面は、砂質粘土系の土砂が、地山から厚さ1m前後堆積し、何層かに分けることができる。堆積状況は、ほぼ水平に堆積し、一部に畦畔と推定される高まりが認められること、堆積土が、攪拌を受けていると考えられる色調、土質を呈していたことから、水田であった可能性が高いと判断した。

これら調査で得られた知見及び遺跡の立地条件などを総合し、田能盆地における中世の集落の存在する可能性がある地域、田能川の氾濫源、山林であった可能性のある地域、水利などから稲作可能地域などを割り出し、田能盆地内の中世土地利用状況想定図を第45図に表した。これによると水田耕作可能な地域は限られていたことがわかる。また、周辺の字名には、外畑、中畑の字名が認められることから、水田耕作不可能な地域は、畑作が大々的に行われていた可能性も考えられる。

また、水田耕作可能地域を前述のように第45図に表したが、中世初期にはこれより耕地面積は少ないと推定される。現在のような景観が作り出されたのは、ため池の築造により盆地上部にまで用水が確保出来るようになったと考えられる、江戸時代に入ってからと推察される。このことは、これまでの発掘調査の成果をみても明らかである。

このことから当時稲作が本業であったとは考えにくく、現在でも一戸あたりの反別は少ない。時代は下るが、江戸時代の文献から、近世においてこの地方が京都の市場に木柴を出荷することで現金収入を得ていたことが記載されており、このことから　この時代にもそのようなことが行われていたものと推察される。現在も農業の傍ら薪き作り生業にしている家も存在する。

またそれ以外には、田能南遺跡B地区において建築材の集積場と推定される遺構を検出していることから、建築材を売ることによっても生計をたてていたものと考えられる。

しかし、今回までの調査では、神社本殿や神像・仏像を寄進したとされる棟札に記載されていたような人々（名主百姓階級）の住居を想定出来る堀割をもった屋敷地や大規模な建物は、検出されていない。しいて挙げれば神宮寺西遺跡で検出した建物１・２を挙げられる程度である。

これらの人々の住居は、現集落と重なるか、それとも圃場整備事業予定地内に存在し、どのようなものであったかは、現在の所不明である。

しかし、来年度には田能盆地内の圃場整備事業に伴う調査が進み、ほぼ細切れではあるが、遺跡の範囲内のほぼ全域が調査されること、また隣接する中畑地区の同事業に伴う遺跡確認調査を実施する予定であり、周辺の状況を含め、田能生全体（樫田地区）の状況がより明らかになるであろう。

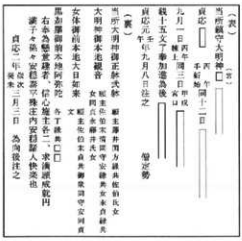


表１　樫船神社棟札

第45図　田能地区中世土地利用想定図

出土遺物計測値表

凡　例

番　号 …… 挿図、図版の遺物番号と一致させた。

色　調 …… 小山正忠・竹原秀雄「新版標準土色帳」日本色彩研究所 1992 により、色名については JIS notation で表した。

胎　土 …… 密、やや密、やや粗、粗の順で表した。

焼　成 …… 堅緻、良好、やや不良、不良の順で表した。

遺跡名 …… 遺跡・地区項目の南は田能南遺跡、北は田能北遺跡を表した。

遺物No.	遺跡地区	遺構・層位	種類	器種	法量 口径	法量 器高	法量 底・高台径	法量 その他	色調	粘土	焼成	残存率	備考
1	南A	包含層	瓦器	椀	(13.2)	残5.2	—	—	(内) N3/0 (外) N4/0 (断) 10Y8/1	やや密	良好	口縁13%	反転復元
2	南A	包含層	瓦器	椀	(13.0)	残3.5	—	—	(内) N3/0 (外) N3/0 (断) N8/0	密	良好	口縁15%	反転復元
3	南A	包含層	瓦器	椀	(12.1)	残3.8	—	—	(内) N3/0 (外) N3/0 (断) N7/0	密	良好	口縁12%	反転復元
4	南A	包含層	瓦器	椀	(13.1)	残3.3	—	—	(内) N7/0 (外) N7/0 (断) N7/0	密	不良	口縁12%	反転復元
5	南A	包含層	瓦器	椀	(12.0)	残3.3	—	—	(内) 2.5Y7/2 (外) 2.5Y7/2 (断) 2.5Y8/2	密	やや不良	口縁15%	反転復元
6	南A	包含層	瓦器	椀	(11.8)	残3.0	—	—	(内) N3/0 (外) N3/0 (断) N3/0	密	良好	口縁8%	反転復元
7	南A	包含層	瓦器	椀	(13.4)	残3.3	—	—	(内) 5Y7/1 (外) 5Y7/1 (断) 5Y7/1	密	良好	口縁7%	反転復元
8	南A	包含層	瓦器	椀	(12.3)	残3.3	—	—	(内) N3/0 (外) N3/0 (断) N7/0	密	良好	口縁10%	反転復元
9	南A	包含層	瓦器	椀	(6.5)	残3.7	高台1.0	—	(内) 2.5Y8/2 (外) 2.5Y8/2 (断) 2.5Y8/2	密	堅緻	口縁13%	反転復元
10	南A	包含層	瓦器	椀	(11.0)	残2.6	—	—	(内) 2.5Y8/2 (外) 2.5Y8/2 (断) 2.5Y8/2	密	不良	口縁10%	反転復元
11	南A	包含層	瓦器	椀	(11.2)	残3.2	—	—	(内) N8/0 (外) N8/0 (断) N7/0	密	良好	口縁33%	反転復元
12	南A	包含層	磁器	青磁碗	(13.4)	残3.4	—	—	(内) 10Y5/2 (外) 10Y5/2 (断) Y7/0	密	堅緻	口縁10%	反転復元
13	南A	包含層	瓦器	椀	(12.0)	残3.8	—	—	(内) N3/0 (外) N3/0 (断) N7/0	密	良好	口縁7%	反転復元
14	南A	包含層	瓦器	椀	(10.6)	4.0	高台(5.3)	—	(内) N7/0 (外) N7/0 (断) N7/0	密	やや不良	口縁12%	反転復元
15	南A	包含層	瓦器	椀	(13.4)	残2.7	—	—	(内) N4/0 (外) N4/0 (断) 10Y8/1	密	良好	口縁12%	反転復元
16	南A	包含層	瓦器	椀	—	残1.8	高台(4.4)	—	(内) N8/0 (外) N3/0 (断) N7/0	密	良好	高台20%	反転復元
17	南A	包含層	瓦器	皿	(10.2)	残1.9	—	—	(内) N3/0 (外) N3/0 (断) N8/0	密	良好	口縁15%	反転復元
18	南A	包含層	土師器	皿	(7.8)	残1.5	—	—	(内) 5YR5/3 (外) 10YR5/3 (断) 5YR6/4	密	良好	口縁20%	反転復元
19	南A	包含層	瓦器	羽釜	(19.4)	残3.5	—	—	(内) N3/0 (外) N3/0 (断) N8/0	密	良好	口縁15%	反転復元
20	南A	包含層	瓦器	羽釜	(20.0)	残3.5	—	—	(内) 2.5Y4/1 (外) 2.5Y7/1 (断) 2.5Y8/1	密	良好	口縁17%	反転復元
21	南A	包含層	瓦器	羽釜	(15.0)	残5.7	—	—	(内) 2.5Y7/2 (外) 2.5Y2/1 (断) 2Y8/1	やや密	良好	口縁8%	反転復元
22	南A	包含層	須恵器	鉢or甕	(24.8)	残5.3	—	—	(内) N7/0 (外) N7/0 (断) N7/0	密	良好	口縁7%	反転復元
23	南A	包含層	須恵器	捕鉢	(30.0)	残3.8	—	—	(内) N3/0 (外) N3/0 (断) N5/0	密	良好	口縁4%	反転復元
24	南A	包含層	須恵器	捕鉢	(19.6)	残3.6	—	—	(内) N7/0 (外) N7/0 (断) N7/0	やや密	良好	口縁7%	反転復元
25	南A	包含層	磁器	白磁碗	—	残2.8	高台6.0	—	(釉) 7.5Y7/2 (断) 10Y8/1	やや密	堅緻	高台23%	反転復元
26	南A	包含層	磁器	青磁碗		残2.9	—	—	(釉) 2.5GY6/1 (断) N8/0	密	良好	高台17%	反転復元
27	南A	包含層	土師質	フイゴ羽口	—	残3.7	—	復元径5.6	(内) 10YR7/2 (外) 5Y7/1 (断) 10YR7/2	やや密	良好	—	—
28	南A	包含層	須恵器	壺	(7.8)	残3.6	—	—	(内) 5Y8/1 (外) 5Y3/1 (断) N7/0	密	良好	口縁8%	反転復元

表2　出土遺物観察表1

遺物No.	遺跡地区	遺構・層位	種類	器種	法量 口径	法量 器高	法量 底・高台径	法量 その他	色調	胎土	焼成	残存率	備考
29	南D	落込み1	瓦器	椀	(13.0)	残2.7	—	—	(内) N6/0 (外) N3/0 (断) N8/0	密	良好	口縁13%	反転復元
30	南B	落込み1	瓦器	椀	(12.4)	残3.2	—	—	(内) N3/0 (外) N3/0 (断) 5YR/1	密	良好	口縁16%	反転復元
31	南D	落込み1	瓦器	椀	(14.4)	残3.9	—	—	(内) N6/0 (外) 7.5Y7/1 (断) 7.5Y7/1	密	良好	口縁8%	反転復元
32	南B	落込み1	瓦器	椀	(12.8)	残4.5	—	—	(内) 2.5YR/1 (外) 2.5YR/1 (断) 2.5YR/1	密	不良	口縁12%	反転復元
33	南B	落込み1	瓦器	椀	(12.0)	残3.0	—	—	(内) N8/0 (外) N3/0 (断) N8/0	密	良好	口縁10%	反転復元
34	南D	落込み1	瓦器	椀	(11.2)	残3.8	—	—	(内) N5/0 (外) N3/0 (断) 2.5GY8/1	密	不良	口縁17%	反転復元
35	南B	落込み1	瓦器	椀	(3.0)	残3.7	—	—	(内) 2.5Y7/2 (外) 2.5Y7/2 (断) 2.5Y7/2	密	良好	口縁11%	反転復元
36	南D	落込み1	瓦器	椀	(12.0)	残3.2	—	—	(内) N3/0 (外) N3/0 (断) 5YR/1	密	良好	口縁12%	反転復元
37	南B	落込み1	瓦器	椀	(11.0)	残3.7	—	—	(内) N8/0 (外) N8/0 (断) N8/0	やや密	不良	口縁20%	反転復元
38	南B	落込み1	瓦器	椀	(11.4)	残3.6	—	—	(内) N3/0 (外) N3/0 (断) N8/0	密	良好	口縁8%	反転復元
39	南D	落込み1	瓦器	椀	(13.2)	残3.2	—	—	(内) N3/0 (外) N3/0 (断) N8/0	密	良好	口縁10%	反転復元
40	南B	落込み1	瓦器	椀	—	残2.1	高台(5.6)	—	(内) 2.5YR/2 (外) 2.5Y7/2 (断) 2.5YR/2	密	不良	高台25%	反転復元
41	南D	落込み1	瓦器	椀	—	残1.2	高台(5.6)	—	(内) N7/0 (外) N7/0 (断) 2.5GY8/1	密	良好	高台50%	反転復元
42	南B	落込み1	瓦器	椀	3.8	残1.7	—	—	(内) N5/0 (外) N3/0 (断) N7/0	やや密	良好	底部のみ	反転復元
43	南D	落込み1	土師器	皿	(14.9)	残2.6	—	—	(内) 2.5Y7/2 (外) 2.5Y7/2 (断) 2.5Y7/2	密	良好	口縁12%	反転復元
44	南B	落込み1	土師器	皿	(11.4)	残2.7	—	—	(内) 2.5Y6/2 (外) 2.5Y6/2 (断) 2.5Y6/2	密	良好	口縁10%	反転復元
45	南B	落込み1	土師器	皿	(9.0)	残1.8	—	—	(内) 2.5Y6/2 (外) 2.5Y6/2 (断) 2.5Y6/2	密	良好	口縁20%	反転復元
46	南B	落込み1	土師器	皿	(7.4)	残1.3	—	—	(内) 2.5Y7/2 (外) 2.5Y7/2 (断) 2.5Y7/2	密	良好	口縁20%	反転復元
47	南B	落込み1	土師器	皿	(9.0)	残1.6	—	—	(内) 2.5Y7/1 (外) 2.5Y7/1 (断) 2.5Y7/1	密	良好	口縁25%	反転復元
48	南B	落込み1	土師器	皿	(8.4)	残1.3	—	—	(内) 2.5Y7/2 (外) 2.5Y7/2 (断) 2.5Y7/2	密	良好	口縁18%	反転復元
49	南B	落込み1	土師器	皿	(7.2)	残1.3	—	—	(内) 2.5Y7/2 (外) 2.5Y7/2 (断) 2.5Y7/2	密	良好	口縁16%	反転復元
50	南B	落込み1	土師器	皿	(9.0)	残1.5	—	—	(内) 7.5YR6/3 (外) 10YR7/2 (断) 7.5YR6/3	密	良好	口縁13%	反転復元
51	南B	落込み1	土師器	皿	(8.4)	残1.4	—	—	(内) 2.5Y6/2 (外) 2.5Y6/2 (断) 2.5Y6/2	密	良好	口縁50%	反転復元
52	南B	落込み1	土師器	皿	(8.4)	1.6	—	—	(内) 2.5Y7/2 (外) 2.5Y7/2 (断) 2.5Y7/2	密	良好	口縁50%	反転復元
53	南B	落込み1	土師器	皿	8.2	1.5	—	—	(内) 2.5Y7/2 (外) 2.5Y7/2 (断) 2.5Y7/2	密	良好	ほぼ完形	反転復元
54	南B	落込み1	土師器	皿	(6.8)	残1.1	—	—	(内) 2.5Y7/2 (外) 2.5Y7/2 (断) 2.5Y7/2	密	良好	口縁20%	反転復元
55	南D	落込み1	土師器	皿	(7.2)	残1.2	—	—	(内) 2.5Y7/2 (外) 2.5Y7/2 (断) 2.5Y7/2	密	良好	口縁11%	反転復元
56	南B	落込み1	陶磁陶器	椀	—	残1.8	高台(5.2)	—	(内) 5G1.7/1 (外) 5G1.7/1 (断) N8/0	やや密	良好	高台35%	反転復元

表3　出土遺物観察表2

遺物No.	遺跡地区	遺構・層位	種類	器種	法量 口径	法量 器高	法量 底・高台径	法量 その他	色調	胎土	焼成	残存率	備考
					（）は復元値								
57	南B	落込み1	磁器	白磁碗	—	残2.2	高台(6.2)	—	(釉) 10Y7/1 (胎・露) 10Y8/1	密	堅緻	高台20%	反転復元
58	南D	落込み1	磁器	白磁碗	—	残1.6	高台(7.0)	—	(内) N8/0 (外) N8/0 (断) N8/0	密	堅緻	高台20%	反転復元
59	南B	落込み1	磁器	白磁碗	—	残2.5	高台(6.0)	—	(釉) 10Y7/1 (胎・露) 10Y8/1	やや密	堅緻	高台25%	反転復元
60	南B	落込み1	須恵器	擂鉢	(29.6)	残4.3			(内) N5/0 (外) N5/0 (断) N5/0	密	良好	口縁11%	反転復元
61	南D	落込み1	須恵器	擂鉢	(24.8)	残2.9	—	—	(内) 7.5GY5/1 (外) 7.5GY5/1 (断) 7.5GY5/1	粗	良好	口縁10%	反転復元
62	南B	落込み1	木製品	板材	308.0 (長)	16.5 (幅)	7.6 (厚)			—	—	—	—
63	南B	落込み1	木製品	板材	747.2 (長)	15.6 (幅)	3.1 (厚)	—	—	—	—	—	
64	南B	落込み1	木製品	板材	230.2 (長)	11.8 (幅)	1.6 (厚)	—	—	—	—	—	—
65	南D	落込み1	木製品	板材	129.3 (長)	11.2 (幅)	1.7 (厚)	—	—	—	—	—	
66	南B	落込み1	木製品	板材	79.4 (長)	12.8 (幅)	2.7 (厚)	—		—	—	—	—
67	南D	落込み1	木製品	板材	80.7 (長)	16.2 (幅)	3.0 (厚)	—	—	—		—	—
68	南B	落込み1	木製品	不明	238.0 (長)	6.4 (径)	—	—	—	—	—	—	—
69	南D	落込み1	木製品	不明	291.0 (長)	5.7 (径)	—	—	—	—		—	—
70	南B	落込み1	木製品	田下駄	39.0 (長)	12.4 (幅)	2.2 (厚)	—	—	—	—	—	
71	南B	包含層	黒色土器	椀	(14.6)	残3.4	—	—	(内) N1.5/0 (外) N1.5/0 (断) N1.5/0	密	良好	口縁7%	反転復元
72	南B	包含層	瓦器	椀	(16.0)	残3.4	—	—	(内) N3/0 (外) N3/0 (断) N3/0	粗	良好	口縁10%	反転復元
73	南B	包含層	瓦器	椀	(13.0)	残4.0	—	—	(内) 5Y8/0 (外) 5Y8/0 (断) 5YR6/0	密	不良	口縁20%	反転復元
74	南B	包含層	瓦器	椀	(14.0)	残5.1	—	—	(内) 5Y8/1 (外) 5Y8/1 (断) 5Y8/1	粗	不良	口縁7%	反転復元
75	南B	包含層	黒色土器	椀	—	残1.7	高台(7.5)	—	(内) N2/0 (外) N2/0 (断) N2/0	密	良好	高台15%	反転復元
76	南B	包含層	瓦器	椀	—	残0.9	高台4.9	—	(内) N3/0 (外) N3/0 (断) N3/0	密	良好	高台のみ	反転復元
77	南B	包含層	瓦器	椀	(13.8)	残4.4	—	—	(内) N5/0 (外) N5/0 (断) N5/0	やや密	良好	口縁13%	反転復元
78	南B	包含層	瓦器	椀	(14.4)	残3.8	—	—	(内) N5/0 (外) N5/0 (断) N5/0	密	良好	口縁13%	反転復元
79	南B	包含層	瓦器	椀	(13.0)	残4.6	—	—	(内) N3/0 (外) N3/0 (断) N3/0	密	良好	口縁10%	反転復元
80	南B	包含層	瓦器	椀	(12.0)	残3.6	—	—	(内) N7/0 (外) N1.5/0 (断) N8/0	粗	良好	口縁13%	反転復元
81	南B	包含層	瓦器	椀	(12.0)	残3.4	—	—	(内) 2.5Y6/3 (外) 2.5Y6/3 (断) 2.5Y6/3	密	不良	口縁25%	反転復元
82	南D	包含層	瓦器	椀	(12.2)	残3.5	—	—	(内) 10YR8/1 (外) 10YR8/1 (断) 10YR8/1	粗	良好	口縁17%	反転復元
83	南B	包含層	瓦器	椀	(13.0)	残3.2	—	—	(内) 7.5Y7/1 (外) 7.5Y7/1 (断) 10Y8/1	密	良好	口縁14%	反転復元
84	南B	包含層	瓦器	椀	(12.0)	残3.5	—	—	(内) 5Y3/1 (外) 5Y3/1 (断) 5Y3/1	粗	良好	口縁14%	反転復元

表4　出土遺物観察表3

遺物No.	遺跡地区	遺構・層位	種類	器種	口径	法量 器高	（）は復元値 底・高台径	その他	色調	胎土	焼成	残存率	備考
85	南B	包含層	瓦器	椀	(11.8)	残3.3	—	—	(内) N3/0 (外) N3/0 (断) N8/0	密	良好	口縁10%	反転復元
86	南H	包含層	瓦器	椀	(12.6)	4.1	高台(4.6)	—	(内) 5YR/1 (外) 5YR/1 (断) 5YR/1	密	不良	高台20% 口縁14%	反転復元
87	南D	包含層	瓦器	椀	(13.6)	残3.7	-	--	(内) 5Y7/1 (外) 5Y7/1 (断) 5Y7/1	密	不良	口縁17%	反転復元
88	南H	包含層	瓦器	椀	(13.0)	残4.3	—	—	(内) N5/0 (外) 5YR/1 (断) 5Y8/1	密	良好	口縁20%	反転復元
89	南B	包含層	瓦器	椀	(12.4)	残4.5	—	—	(内) N5/0 (外) N5/0 (断) N8/0	密	良好	口縁14%	反転復元
90	南H	包含層	瓦器	椀	(10.4)	残4.9	高台(5.2)	—	(内) 5Y3/1 (外) 7.5Y2/1 (断) 5Y8/1	密	良好	口縁11%	反転復元
91	南B	包含層	瓦器	椀	(12.0)	残3.0	--	--	(内) 10YR5/1 (外) 10YR5/1 (断) 10YR5/1	密	不良	口縁10%	反転復元
92	南B	包含層	土師器	皿	(10.2)	残1.9	—	—	(内) 10Y7/1 (外) N7/0 (断) N7/0	密	良好	口縁30%	反転復元
93	南B	包含層	土師器	皿	(16.2)	残1.9	—	—	(内) 2.5Y7/2 (外) 2.5Y7/2 (断) 2.5Y7/2	密	良好	口縁15%	反転復元
94	南B	包含層	土師器	皿	(14.2)	残2.7	—	—	(内) 10YR6/3 (外) 10YR6/2 (断) 10YR6/3	密	良好	口縁10%	反転復元
95	南B	包含層	土師器	皿	(11.8)	残2.4	—	—	(内) 2.5Y7/2 (外) 2.5Y7/2 (断) 2.5Y7/2	密	良好	口縁10%	反転復元
96	南D	包含層	土師器	皿	(12.4)	残2.2	—	—	(内) 10YR6/1 (外) 10YR5/1 (断) 10YR5/1	密	良好	口縁16%	反転復元
97	南H	包含層	土師器	皿	(10.8)	残1.9	—	—	(内) 5Y8/1 (外) 5YR/1 (断) 5Y8/1	密	良好	口縁13%	部分反転
98	南D	包含層	土師器	皿	(10.2)	残1.9	—	--	(内) 2.5Y7/2 (外) 2.5Y7/2 (断) 2.5Y7/2	密	良好	口縁17%	反転復元
99	南H	包含層	土師器	皿	(8.0)	残1.0	—	—	(内) 2.5Y7/2 (外) 2.5Y7/2 (断) 2.5Y7/2	密	良好	口縁25%	反転復元
100	南D	包含層	土師器	皿	(8.0)	残1.7			(内) 10YR6/4 (外) 10YR7/2 (断) 10YR7/2	密	良好	口縁40%	反転復元
101	南B	包含層	土師器	皿	(7.6)	残2.0	—	—	(内) N7/0 (外) N1.5/0 (断) N8/0	やや密	良好	口縁18%	反転復元
102	南H	包含層	陶器	青磁碗	--	残1.2	高台(5.4)	--	(釉) 7.5Y6/2 (断・素) N8/0	密	堅緻	高台30%	反転復元
103	南B	包含層	須恵器	擂鉢	(24.0)	残4.3	—	—	(内) 7.5Y6/1 (外) 7.5Y6/1 (断) 7.5Y6/1	密	良好	口縁10%	反転復元 条切り痕あり
104	南H	包含層	須恵器	擂鉢	(22.6)	残4.0	—	—	(内) N3/0 (外) N3/0 (断) N3/0	密	良好	口縁10%	反転復元
105	南B	包含層	須恵器	杯身	(9.6)	残1.3	—	—	(内) 10Y7/1 (外) 10Y7/1 (断) 10Y7/1	やや密	良好	底部10%	反転復元
106	南C	包含層	須恵器	甕	(18.8)	残3.0	—	—	(内) N7/0 (外) N7/0 (断) N8/0	やや密	良好	口縁15%	反転復元
107	南C	包含層	須恵器	擂鉢	—	残3.1	底(12.0)	—	(内) N7/0 (外) N8/0 (断) N7/0	密	良好	底部15%	反転復元
108	南D	SP65	黒色土器	椀	—	残0.9	高台(6.4)	-	(内) 10YR3/1 (外) 10YR6/3 (断) 10YR3/1	密	良好	高台23%	反転復元
109	南D	SP104	黒色土器	椀	(13.6)	残3.5	—	—	(内) 10YR2/1 (外) 2.5YR4/6 (断) 5YR1/6	やや密	良好	口縁10%	反転復元
110	南D	SP109	土師質	土錘	—	縦4.4 横1.4	—	穴径4.0	(内) 5YR/1 (外) 5YR/1 (断) N8/0	やや密	良好	完形	—
111	南D	包含層	瓦器	椀	(12.8)	残3.3	—	—	(内) N3/0 (外) N3/0 (断) 5YR/1	密	良好	口縁8%	反転復元
112	南D	包含層	瓦器	椀	—	残0.9	高台(6.0)	—	(内) N5/0 (外) N5/0 (断) N8/0	密	不良	高台20%	反転復元

表5　出土遺物観察表4

遺物No.	遺跡地区	遺構・層位	種類	器種	口径	法量（）は復元値 器高	底・高台径	その他	色調	胎土	焼成	残存率	備考
113	南D	包含層	瓦器	椀	–	残1.0	高台(6.0)	–	(内) N3/0 (外) N3/0 (断) N7/0	密	良好	高台15%	反転復元
114	南D	包含層	土師器	皿	(8.8)	残1.3	–	–	(内) 5Y5/1 (外) 5Y8/1 (断) 5Y8/1	粗	良好	口縁15%	反転復元
115	南D	包含層	磁器	白磁碗	(14.0)	残2.9	–	–	(内) 2.5Y8/1 (外) 2.5Y8/1 (断) 2.5Y8/1	密	堅緻	口縁7%	反転復元
116	南D	包含層	磁器	青磁碗	(14.0)	残4.4	–	–	(釉) 10Y6/2 (断) 10Y7/1	密	堅緻	口縁9%	反転復元
117	南D	包含層	須恵器	杯身?	–	残1.0	高台(6.6)	–	(内) 10Y7/1 (外) 10Y7/1 (断) 10Y7/1	密	良好	高台12%	反転復元 糸切り痕あり
118	南D	包含層	須恵器	椀	–	残1.8	高台(5.0)	–	(内) N6/0 (外) N6/0 (断) N6/0	密	良好	高台16%	反転復元 糸切り痕あり
119	南E	包含層	瓦器	椀	(16.8)	残4.6	–	–	(内) N3/0 (外) N3/0 (断) N8/0	密	良好	口縁9%	反転復元
120	南E	包含層	瓦器	椀	(17.0)	残5.3	–	–	(内) 2.5Y7/1 (外) 2.5Y7/1 (断) 2.5Y7/1	粗	やや不良	口縁10%	反転復元
121	南E	包含層	瓦器	椀	(13.0)	残3.8	–	–	(内) N3/0 (外) N3/0 (断) N7/0	密	良好	口縁7%	反転復元
122	南E	包含層	瓦器	椀	(13.0)	残3.7	–	–	(内) N3/0 (外) N3/0 (断) N7/0	粗	やや不良	口縁10%	反転復元
123	南E	包含層	瓦器	椀	(11.6)	残4.2	–	–	(内) N3/0 (外) N3/0 (断) N8/0	密	良好	口縁6%	反転復元
124	南E	包含層	瓦器	椀	(10.8)	残2.9	–	–	(内) N7/0 (外) 5Y8/1 (断) N7/0	粗	やや不良	口縁13%	反転復元
125	南E	包含層	瓦器	椀	–	残2.5	高台(5.3)	–	(内) N3/0 (外) N3/0 (断) N8/0	密	良好	高台18%	反転復元
126	南E	包含層	瓦器	椀	–	残1.3	高台(5.0)	–	(内) N3/0 (外) N3/0 (断) N7/0	密	良好	高台17%	反転復元
127	南E	包含層	土師器	皿	(7.4)	残1.3	–	–	(内) 2.5Y7/2 (外) 2.5Y7/2 (断) 2.5Y7/2	密	良好	口縁20%	反転復元
128	南E	包含層	磁器	白磁碗	(16.0)	残3.8	–	–	(釉) 10Y7/1 (断) 10Y8/1	密	堅緻	口縁10%	反転復元
129	南E	包含層	磁器	白磁碗	(14.2)	残2.7	–	–	(釉) 7.5Y7/2 (断) N7/0	密	堅緻	口縁10%	反転復元
130	南E	包含層	磁器	白磁碗	(15.0)	残2.8	–	–	(釉) 7.5Y7/2 (断) 7.5YR/1	密	堅緻	口縁10%	反転復元
131	南E	包含層	磁器	白磁碗	(15.0)	残3.0	–	–	(釉) 7.5Y7/1 (断・露) 7.5YR/1	粗	堅緻	口縁8%	反転復元
132	南E	包含層	磁器	青磁碗	(15.0)	残4.6	–	–	(釉) 7.5Y6/2 (外・露) 10Y6/1	密	堅緻	口縁13%	反転復元
133	南E	包含層	須恵器	擂鉢	(24.8)	残4.3	–	–	(内) N6/0 (外) N6/0 (断) N6/0	やや粗	良好	口縁3%	反転復元
134	南E	包含層	須恵器	擂鉢	(25.6)	残5.0	–	–	(内) N5/0 (外) N5/0 (断) N4/0	密	良好	口縁12%	反転復元
135	南E	包含層	瓦器	皿	(4.7)	残3.1	–	–	(内) N6/0 (外) N6/0 (断) N7/0	粗	良好	口縁23%	反転復元
136	南E	包含層	陶器	天目茶碗	(10.8)	残4.9	–	–	(釉) 10YR3/1 (外) 10YR5/3 (断・露) 5Y8/1	密	良好	口縁23%	反転復元
137	南E	SP159	近世陶器	皿	(14.7)	残1.7	–	–	(内) 2.5Y8/2 (外) 2.5Y8/2 (断) 2.5Y8/2	密	良好	口縁7%	反転復元
138	南E	SP159	瓦器	椀	(9.8)	残2.2	–	–	(内) N7/0 (外) N7/0 (断) N8/0	密	やや不良	口縁12%	反転復元
139	南E	SP159	瓦器	羽釜	(19.2)	残4.0	–	–	(内) N7/0 (外) N7/0 (断) N7/0	密	不良	口縁8%	反転復元
140	南F	SK201	瓦器	椀	(14.8)	残2.7	–	–	(内) N3/0 (外) N3/0 (断) N7/0	密	良好	口縁5%	反転復元

表6　出土遺物観察表5

遺物No.	遺跡地区	遺構・層位	種類	器種	法量 口径	法量 器高	法量 底・台径	法量 その他	色調	胎土	焼成	残存率	備考
					( )は復元値								
141	南F	包含層	土器	椀	(13.6)	残2.4	…	—	(内) N3/0 (外) N3/0 (断) N7/0	密	良好	口縁5%	反転復元
142	南F	包含層	瓦器	椀	(11.6)	残2.4	—	—	(内) N3/0 (外) N3/0 (断) N3/0	密	良好	口縁10%	反転復元
143	南F	包含層	土器	椀	(10.0)	残2.7	—	—	(内) 10Y7/1 (外) 10Y7/1 (断) N8/0	密	良好	口縁13%	反転復元
144	南F	包含層	土器	椀	(12.8)	残3.3	—	—	(内) N4/0 (外) N4/0 (断) N6/0	密	良好	口縁15%	反転復元
145	南F	包含層	瓦器	椀	(12.4)	残2.5	—	—	(内) 2.5Y7/2 (外) 2.5Y7/2 (断) 2.5Y7/2	やや密	良好	口縁9%	反転復元
146	南F	包含層	土器	椀	…	残1.9	高台(5.6)	—	(内) N3/0 (外) N3/0 (断) N8/0	密	良好	高台12%	反転復元
147	南F	包含層	土師器	皿	—	残2.3	—	—	(内) 7.5YR7/3 (外) 7.5YR7/3 (断) 2.5YR/3	密	良好	口縁18%	反転復元
148	南F	包含層	磁器	青磁碗	…	残1.0	高台(5.1)	…	(釉) 7.5GY6/1 (露) 7.5YR6/2 (胎) 5GY8/1	密	堅緻	高台55%	反転復元
149	南F	包含層	須恵器	椀	(11.2)	残3.5	—	—	(内) N7/0 (外) N7/0 (断) N7/0	密	良好	口縁10%	反転復元
150	南F	包含層	須恵器	椀	—	残0.9	高台(6.6)	…	(内) N6/0 (外) N6/0 (断) N6/0	密	良好	高台25%	反転復元
151	南F	包含層	須恵器	椀	—	残1.1	高台(5.4)	—	(内) N3/0 (外) N3/0 (断) N3/0	密	良好	高台35%	反転復元
152	南F	包含層	須恵器	杯身	—	残3.1	高台(11.3)	—	(内) N6/0 (外) N5/0 (断) N6/0	密	良好	高台11%	反転復元
153	南F	包含層	須恵器	横瓶	(26.0)	残8.0	—	—	(内) N7/0 (外) N6/0 (断) N7/0	密	良好	口縁8%	反転復元
154	南F	包含層	緑釉陶器	椀	(10.8)	残3.2	—	—	(釉) 深緑 (断) N4/0	密	良好	口縁7%	反転復元
155	南F	包含層	緑釉陶器	椀?	…	残1.8	—	—	(釉) 深緑 (断) 2.5Y8/1	密	やや不良	—	—
156	北B	SP14	土師器	皿	(8.6)	0.9	—	—	(内) 2.5Y7/3 (外) 2.5Y7/3 (断) 2.5Y7/3	密	良好	10%	反転復元
157	北B	包含層	磁器	青磁皿	(10.1)	残2.45	—	…	(内) 2.5GY7/1 (外) 2.5GY6/1 (胎) 7.5Y8/1	密	良好	口縁20%	反転復元
158	北B	包含層	陶器	甕	—	残7.45	底(13.6)	—	(内) N7/0 (外) N7/0 (断) N7/0	密	良好	底部20%	反転復元
159	北C	SX5	瓦器	椀	(12.4)	残3.9	—	…	(内) N4/0 (外) N4/0 (断) 5Y8/1	密	良好	口縁25%	反転復元
160	北C	SX5	土器	椀	(13.0)	残4.2	…	—	(内) N3/0 (外) N3/0 (断) N6/0	密	良好	口縁15%	反転復元
161	北C	SX5	瓦器	椀	(11.8)	残3.8	—	—	(内) N3/0 (外) N3/0 (断) 10Y8/1	密	良好	18%	反転復元
162	北C	SX5	土器	椀	(14.5)	残3.5	—	—	(内) N4/0 (外) N4/0 (断) N8/0	密	良好	口縁20%	反転復元
163	北C	SX5	瓦器	椀	(14.0)	2.9	—	…	(内) N4/0 (外) N4/0 (断) N8/0	密	良好	口縁15%	反転復元
164	北C	SX5	土器	椀	(13.0)	残3.6	…	—	(内) 2.5Y8/2 (外) 2.5Y8/2 (断) 2.5Y8/2	密	不良	口縁20%	反転復元
165	北C	SX5	瓦器	椀	(14.4)	残3.3	—	…	(内) N4/0 (外) N4/0 (断) N8/0	密	良好	口縁15%	反転復元
166	北C	SK50	磁器	青磁皿	(8.6)	2.9	5.5	—	(釉) 5Y6/3 (断・露) 5Y8/2	密	良好	60%	反転復元
167	北C	SK50	磁器	青磁皿	…	残10.8	5.6 (腰部得)	…	(釉) 5Y6/3 (断・露) 5Y8/2	密	良好	口縁70%	一部反転復元
168	北C	SD106	瓦器	椀	(12.9)	残4.4	…	—	(内) N4/0 (外) N4/0 (断) 5Y8/2	密	良好	口縁20%	反転復元

表7　出土遺物観察表6

遺物No.	遺跡地区	遺構・層位	種類	器種	法量 口径	法量 器高	法量 底・高台径	法量 その他	色調	胎土	焼成	残存率	備考
169	北C	SD106	瓦器	椀	(14.2)	4.6	高(4.2)		(内) N3/0 (外) N3/0 (断) 10Y7/1	密	良好	31%	反転復元
170	北C	包含層	瓦器	椀	(14.6)	残3.7	—	—	(内) N3/0 (外) N3/0 (断) N8/0	密	良好	口縁12%	反転復元
171	北C	包含層	瓦器	椀	(15.0)	残4.3	—	—	(内) N3/0 (外) N3/0 (断) N8/0	密	良好	口縁10%	反転復元
172	北C	包含層	瓦器	椀	(15.6)	残4.9	—	—	(内) N4/0 (外) N4/0 (断) 5YR/1	密	やや不良	31%	反転復元
173	北C	包含層	瓦器	椀	(14.8)	残3.6	—	—	(内) N3/0 (外) N3/0 (断) N4/0	密	良好	口縁20%	反転復元
174	北C	包含層	瓦器	椀	(15.6)	残3.35	—	—	(内) 7.5Y3/1 (外) 7.5Y3/1 (断) 7.5Y8/1	密	良好	口縁10%	反転復元
175	北C	包含層	瓦器	椀	(13.2)	4.05	高台(5.6)	—	(内) N2/0 (外) N3/0 (断) 10Y8/1	密	良好	55%	一部反転復元
176	北C	包含層	瓦器	椀	(13.8)	残3.2	—	—	(内) N2/0 (外) N3/0 (断) N8/0	密	良好	口縁13%	反転復元
177	北C	包含層	瓦器	椀	(13.4)	残4.2	—	—	(内) 5YR7/4 (外) 5Y4/1 (断) 7.5YR7/3	密	不良	口縁10%	反転復元
178	北C	包含層	瓦器	椀	(15.4)	残3.8	—	—	(内) N4/0 (外) N4/0 (断) N8/0	粗	良好	口縁10%	反転復元
179	北C	包含層	瓦器	椀	(14.0)	残2.8	—	—	(内) N2/0 (外) N2/0 (断) N8/0	密	良好	口縁10%	反転復元
180	北C	包含層	瓦器	椀	(12.4)	残2.4	—	—	(内) N4/0 (外) N4/0 (断) 5YR/1	粗	やや不良	口縁10%	反転復元
181	北C	包含層	瓦器	椀	(11.0)	残3.8	—	—	(内) N3/0 (外) N3/0 (断) N7/0	密	良好	口縁10%	反転復元
182	北C	包含層	瓦器	椀		残1.4	高台(6.4)	—	(内) N4/0 (外) N4/0 (断) 5YR3/2	粗	やや不良	高台40%	反転復元
183	北C	包含層	瓦器	椀	—	残1.9	高台(4.5)	—	(内) N4/0 (外) N4/0 (断) 7.5YR/1	密	良好	高台30%	反転復元
184	北C	包含層	瓦質	羽釜	(18.0)	残5.4	—	—	(内) 7.5Y4/1 (外) 7.5Y4/1 (断) 7.5Y4/1	やや粗	やや不良	口縁10%	反転復元
185	北C	包含層	磁器	白磁碗	(16.6)	残3.1	—	—	(内) 7.5Y7/1 (外) 7.5Y7/1 (断) 7.5Y8/1	密	良好	口縁10%	反転復元
186	北C	包含層	土製品	土錘	—	—	—	長3.25 幅1.05	(内) 10YR7/2 (外) 5YR6/4	粗	良好	完形	〃
187	北E	SP93	瓦器	椀	(15.0)	5.9	6.6		(内) N3/0 (外) N3/0	密	やや不良	40%	一部反転復元
188	北E	SP20	瓦器	椀	(14.8)	5.5	5.9	—	(内) N4/0 (外) 2.5Y3/1	密	良好	20%	反転復元
189	北E	SD70	瓦器	椀	(15.0)	残4.9		—	(内) N4/0 (外) N4/0 (断) N8/0	粗	良好	口縁30%	反転復元
190	北H	SP104	瓦器	椀	—	残2.2	(6.4)	—	(内) N5/0 (外) N5/0 (断) N8/0	粗	良好	底部20%	反転復元
191	北E	SP66	土師器	皿	(7.4)	1.45			(内) 2.5YR7/1 (外) 2.5YR7/1 (断) 2.5Y8/1	粗	良好	25%	反転復元
192	北E	SP75	土師器	皿	(8.3)	残1.3	—	—	(内) 5YR7/4 (外) 7.5YR6/4 (断) 5YR7/4	密	良好	口縁12%	反転復元
193	北E	包含層	瓦器	椀	(15.4)	残4.6	—	—	(内) N2/0 (外) N2/0 (断) 2.5Y8/3	密	良好	口縁18%	反転復元
194	北E	包含層	瓦器	椀	(15.8)	残2.8	—	—	(内) N4/0 (外) N4/0 (断) 5Y8/2	粗	良好	口縁12%	反転復元
195	北E	包含層	瓦器	椀	(7.9)	残3.9	—	—	(内) N4/0 (外) N4/0 (断) N8/0	密	良好	口縁15%	反転復元
196	北E	包含層	瓦器	椀	(11.0)	残3.0	—	—	(内) N3/0 (外) N3/0 (断) 2.5Y8/4	粗	良好	口縁14%	反転復元

表8　出土遺物観察表7

遺物No.	遺跡地区	遺構・層位	種類	器種	口径	広袋 器高	広袋 底・前谷径	広袋 その他	色調	胎土	焼成	残存率	備考
197	北B	包含層	瓦器	椀	—	残2.3	高台(5.7)	—	(内) N4/0 (外) N4/0 (断) 5Y7/1	密	良好	高台25%	反転復元
198	北D	包含層	瓦器	椀	—	残1.35	高台(6.6)	—	(内) N4/0 (外) N4/0 (断) N3/0	密	良好	高台25%	反転復元
199	北E	包含層	瓦器	椀	—	残1.5	高台(8.1)	—	(内) N3/0 (外) N3/0 (断) 7.5YR7/1	密	良好	高台19%	反転復元
200	北E	包含層	瓦器	椀	—	残1.3	高台(8.4)	—	(内) N2/0 (外) N2/0 (断) N8/0	密	良好	高台24%	反転復元
201	北E	包含層	瓦器	皿	(9.8)	1.4	底(7.6)	—	(内) 10YR3/1 (外) 10YR5/1 (断) 2.5YR8/1	密	良好	15%	反転復元
202	北F	包含層	瓦器	皿	(10.6)	残1.0		—	(内) N3/0 (外) N3/0 (断) N8/0	密	良好	口縁13%	反転復元
203	北E	包含層	土師器	皿	(9.0)	1.4	—	—	(内) 5YR7/6 (外) 5YR7/6 (断) 5YR7/6	密	良好	口縁11%	反転復元
204	北F	包含層	磁器	青磁碗	(8.4)	残2.9	—	—	(内) 7.5GY6/2 (外) 7.5GY6/2 (断) 7.5YR8/1	密	良好	口縁10%	反転復元
205	北D	包含層	磁器	青磁碗	(16.3)	残3.4	—	—	(内) 7.5GY6.5/2 (外) 7.5GY6.5/2 (断) 1Y7.5/2	緻密	良好	口縁13%	反転復元
206	北H	包含層	磁器	青磁碗	(13.6)	残2.8	—	—	(内) 7.5Y6/2 (外) 7.5Y6/2 (断) 7.5YR8/1	密	良好	口縁10%	反転復元
207	北D	包含層	磁器	白磁碗	(15.8)	残3.4	—	—	(内) 7Y8/0.5 (外) 7Y8/0.5 (断) 7Y8/0.5	緻密	良好	口縁22%	反転復元
208	北H	包含層	磁器	白磁碗	(17.6)	残2.9	—	—	(内) 6.5Y7/2 (外) 6.5Y7/2 (断) 7Y8/2	緻密	良好	口縁10%	反転復元
209	北D	包含層	須恵器	杯	—	残2.4	高台(11.1)	—	(内) N7/0 (外) N7/0 (断) N7/0	密	良好	高台21%	反転復元
210	北K	包含層	須恵器	壺		残2.3	底(10.2)	—	(内) N7/0 (外) N7/0 (断) N7/0	密	良好	底部11%	反転復元
211	北I	SD68	瓦器	椀	(12.4)	残3.4	—	—	(内) 2.5Y7/1 (外) 2.5Y7/1 (断) 2.5YR8/1	密	良好	口縁11%	反転復元
212	北I	SD68	瓦器	椀	—	残3.9	高台(4.6)	—	(内) 10YR8/2 (外) 10YR8/2 (断) 5YR7/6	密	やや不良	高台16%	反転復元
213	北I	SD68	須恵器	杯蓋	(14.6)	残1.3	—	—	(内) N7/0 (外) N7/0 (断) N4/0	密	良好	口縁8%	反転復元
214	北I	SD68	須恵器	杯身	—	残1.2	—	—	(内) 10Y7/1 (外) 10Y7/1 (断) 10Y7/1	密	良好	—	反転復元
215	北I	SK10	瓦器	椀	(12.2)	4.0	—	—	(内) 7.5Y2/1 (外) 7.5Y2/1 (断) 7.5YR8/1	密	良好	口縁12%	反転復元
216	北I	SD85	土師器	椀	—	残0.8	底(6.0)	—	(内) 2.5YR/3 (外) 7.5YR8/4 (断) 7.5YR8/1	密	良好	底部17%	反転復元
217	北F	包含層	瓦器	椀	(13.2)	残3.9	—	—	(内) N3/0 (外) N3/0 (断) N8/0	密	良好	口縁10%	反転復元
218	北I	包含層	瓦器	椀	(12.0)	残3.6	—	—	(内) N3/0 (外) N3/0 (断) 7.5YR8/1	密	良好	口縁14%	反転復元
219	北I	包含層	須恵器	長頸壺	—	残5.4	—	—	(内) N8/0 (外) N8/0 (断) N8/0	密	良好	—	一部反転復元
220	南F	包含層	黒色土器	椀	—	残2.4	—	—	(内) 10YR3/1 (外) 10YR3/1 (断) 10YR3/1	密	良好	—	
221	北C	包含層	瓦器	椀	—	残1.7	(6.0)	—	(内) N8/0 (外) N4/0 (断) N8/0	密	良好	底部20%	反転復元

表9　出土遺物観察表8

報 告 書 抄 録

ふりがな	たのういせきぐんはっくつちょうさがいよう・Ⅲ
書名	田能遺跡群発掘調査概要・Ⅲ
副書名	農地還元利活用事業「樫田地区」に伴う発掘調査
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	奥 和之
編集機関	大阪府教育委員会　文化財保護課
所在地	〒540-8571　大阪府大阪市中央区大手前2丁目　TEL. 06-6941-0351
発行年月日	2002年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	面積 (㎡)	調査原因
たのうみなみいせき 田能南遺跡	たかつきしおおあざ 高槻市大字	27207	179	135° 35′ 42″	34° 57′ 19″	2000年9月～ 2002年3月	2,211	府営農地還元利活用事業（樫田地区）
たのうちたいせき 田能北遺跡	たのうち 田能地内		178	135° 35′ 30″	34° 57′ 03″	2001年6月～ 同年12月	2,950	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
田能南遺跡	集落跡	平安時代 中　世 江戸時代	建物跡 建築材の集積場 柵列 溝 土坑	黒色土器 緑釉陶器 瓦器 土師器 青磁 白磁 須恵器 木製品	
田能北遺跡	集落跡	平安時代 中　世 江戸時代	建物跡 柵列 溝 土坑	黒色土器 緑釉陶器 瓦器 土師器 青磁 白磁 須恵器	

図　　版

調査地区全景（南西より）

図版１
田能南遺跡

１．Ａ地区全景
南より

２．Ｂ地区
遺物出土状況
東より

３．Ａ地区基本断面（２）

４．Ｂ地区基本断面

図版２
田能南遺跡

１．落込み１
遺物出土状況
北より

２．落込み１
遺物出土状況（細部）
東より

３．B地区全景
西より

図版３
田能南遺跡

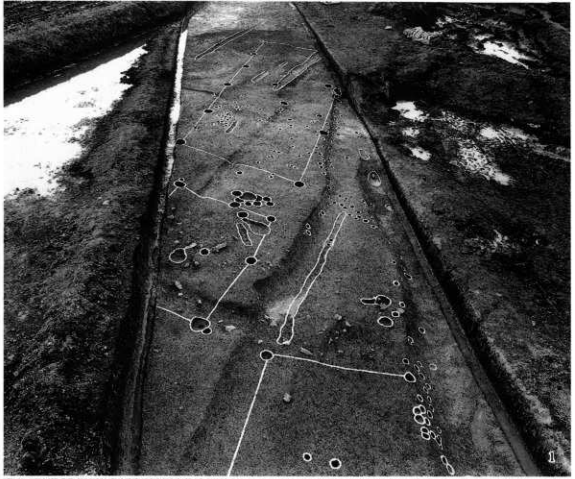
１．D地区全景
東より

２．D地区全景
西より

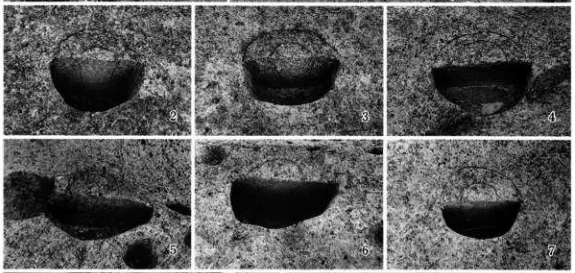
３．D地区基本断面（４）

４．D地区基本断面（１）

図版4
田能南遺跡



1．建物1・2
東より



2．建物1 SP10
3．建物1 SP12
4．建物1 SP13
5．建物1 SP62
6．建物1 SP64
7．建物1 SP65

8．建物2
東より

図版5
田能南遺跡

1．E地区全景
西より

2．櫛列1
西より

3．E地区基本断面
4．櫛列1 SP148
5．櫛列1 SP149
6．櫛列1 SP150
7．櫛列1 SP151

図版 6
田能南遺跡

1．F地区全景
南より

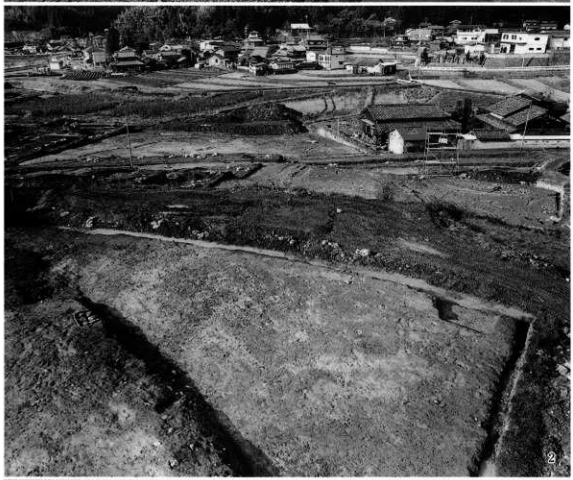
2．土坑2・3
南より

3．F地区基本断面（1）

4．F地区基本断面（4）

図版7
田能北遺跡

1．全景
南東より

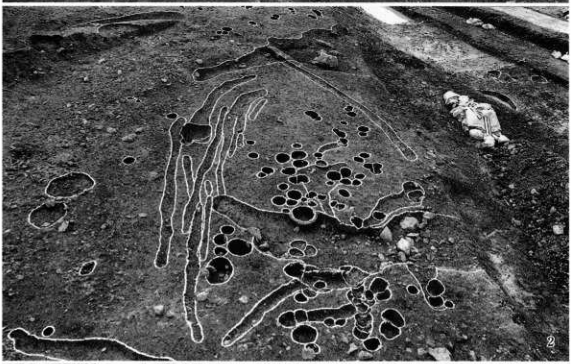


2．B･C･D･I地区全景
東より

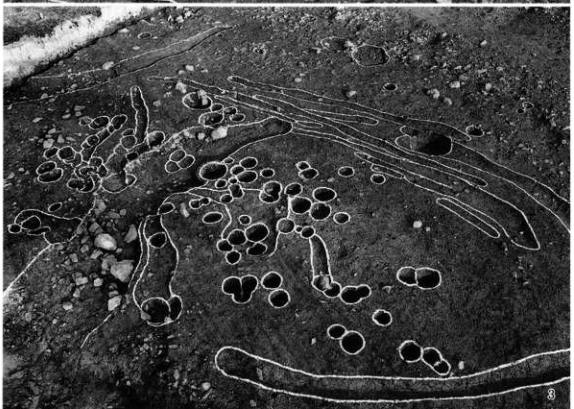
3．C地区基本断面
4．E地区基本断面
5．I地区基本断面

図版8
田能北遺跡

1．C地区全景
南より



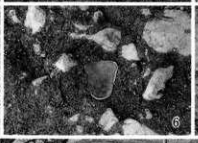
2．C地区建物群
北より



3．C地区建物群
南西より

図版9
田能北遺跡

1．E地区建物1
南より



2．建物1 SP10
3．建物1 SP25
4．建物1 SP68
5．建物1 SP92
6．SP20遺物出土状況
7．SP93遺物出土状況

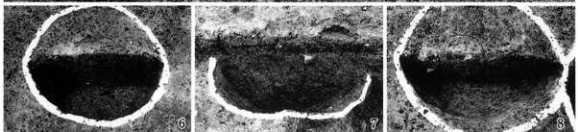
8．I地区全景
南より

図版10
田能北遺跡

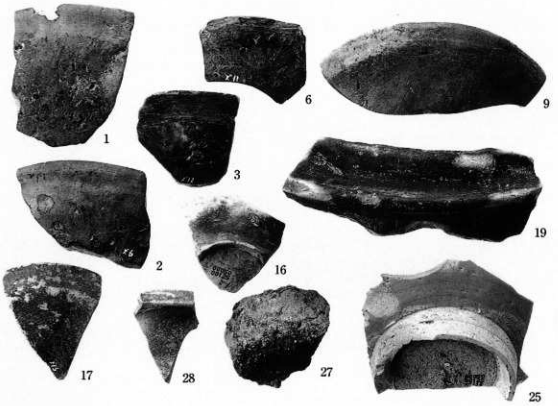
1．建物3
北東より

2．建物3 SP54
3．建物3 SP62
4．建物3 SP69

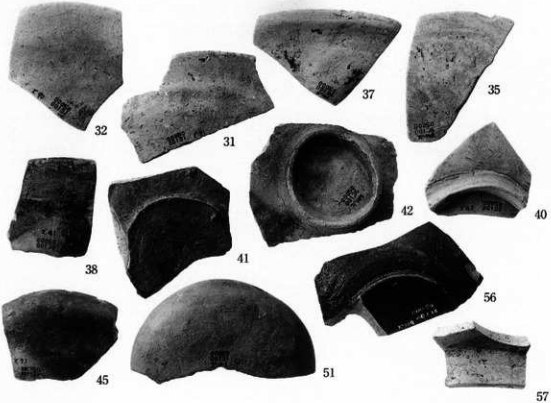
5．建物2
東より



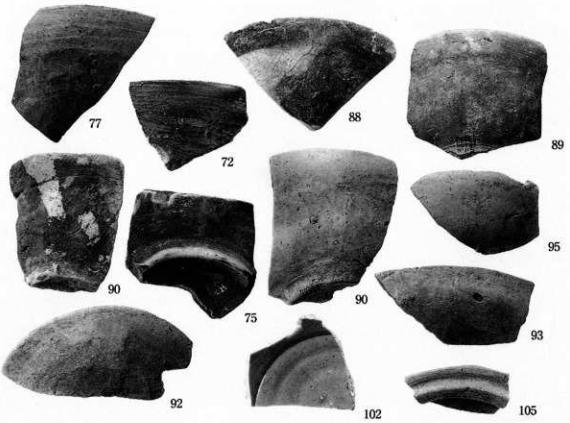
6．建物2 SP26
7．建物2 SP32
8．建物2 SP87



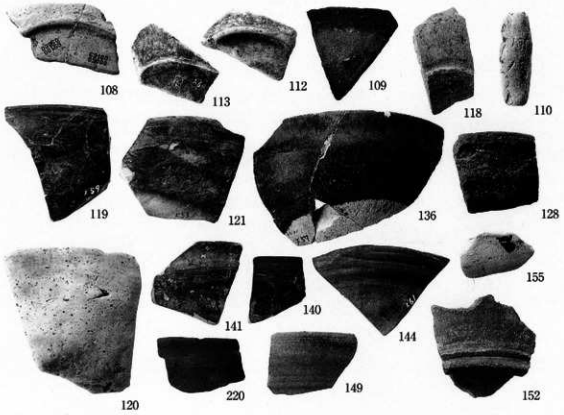
田能南遺跡　A地区



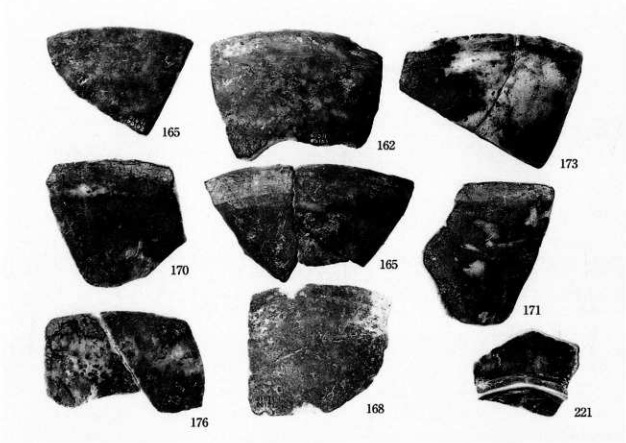
田能南遺跡　B地区落込み1



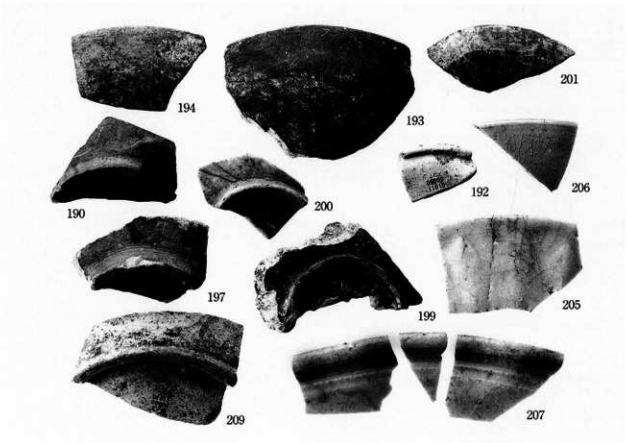
田能南遺跡　B地区包含層



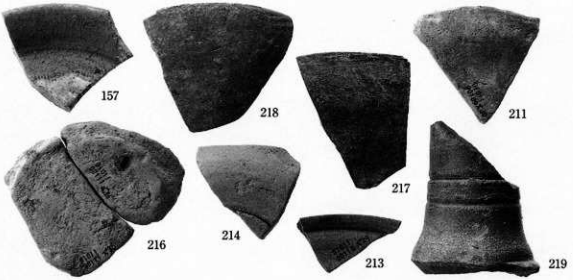
田能南遺跡　D・E・F地区



田能北遺跡　C地区



田能北遺跡　E・H地区



田能北遺跡　B・Ⅰ地区

53

161

166

169

172

175

187

188

田能遺跡群発掘調査概要・Ⅲ

－農地還元利活用事業「樫田地区」に伴う発掘調査－

発　行　大阪府教育委員会
〒540-8571
大阪市中央区大手前2丁目
TEL. 06-6941-0351
発行日　2002年3月29日
印　刷　株式会社　中島弘文堂印刷所
大阪市東成区深江南2－6－8
TEL. 06-6976-8761